



文化庁委嘱事業

文化ボランティア
全国フォーラム
2006レポート

文化ボランティアが 〈あなたと日本を〉 元気にする！

～出会う・つながる・動きだす～

文化庁委嘱事業

文化ボランティア 全国フォーラム2006レポート

— 目次 —

ごあいさつ 出会い・つながり・動き出した文化ボランティア ————— 3 文化ボランティア全国フォーラム実行委員長 大久保 邦子	第3分科会 地域でこどものアートを支援する ————— 18
プログラム ————— 4	第4分科会 公共文化施設とボランティア ————— 19 ～市民・NPOが担う指定管理者制度って？～
貴重(な)講演 文化ボランティアで日本を元気に! ————— 6 文化庁長官 河合 隼雄	第5分科会 野外ワークショップ「NWEC図鑑」をつくろう! — 20 ～発見・提案・企画・実行～
事例発表1 「八雲国際演劇祭」と人づくり ————— 8 園山 土筆(八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしぶえ代表)	第6分科会 ミュージアム・ボランティアの課題と未来を語る — 21
事例発表2 九州国立博物館のボランティア ————— 9 糸井 茂(九州国立博物館交流課事務主査)	第7分科会 市民活動支援の悩み相談室 ————— 22
事例発表3 本物に触れて!輝いて! 子どもの美術教育をサポートする会 ————— 10 津屋 結唱子(子どもの美術教育をサポートする会代表)	第8分科会 文化ボランティア、そのマネジメントの極意を学ぶ — 23
事例発表4 学生ボランティアの展開 ————— 11 Live in Space Project 富樫 悟(東海大学3年)、木下 萌(上智大学2年)	みんなのかたり場「明日に向けて」 〈第一部〉分科会であったこと ————— 24 〈第二部〉「文化ボランティアの未来!」 ————— 26 ～参加者とともに～ コラム:けんかがつなげる!?文化ボラ
交流の夕べ&情報交換会 ————— 12 コラム:ナイトセッション 音楽ボランティアのこと、話そう	文化ボランティア全国フォーラム2006 アンケート — 28
深夜スペシャルトーク 市民と行政…文化ボランティアがつなぎ役 ————— 14	フォーラムを終えて 実行委員、文化庁担当者、事務局より — 30
ポスターセッション ————— 15 コラム:アニメ『雲の学校』の上映	そんな日があったから～開催までの経緯～ ————— 32
第1分科会 学生ボランティアからの発信 ————— 16	製作物いろいろ 準備から運営までに製作した主なもの — 33
第2分科会 文化でまちづくり、人づくり ————— 17	参加されたみなさん ————— 34

ごあいさつ

「文化ボランティア全国フォーラム2006」(文化庁委嘱)

出会い・つながり・動き出した文化ボランティア

今回、初めての「文化ボランティア全国フォーラム2006」が、埼玉県嵐山町の国立女性教育会館を会場に開催されました。

一堂に会したのは、北は北海道、南は沖縄からの熱心な文化ボランティア関係者ら約250名。学生、主婦、定年退職者、自治体文化ボランティア担当者、研究者、マスコミ関係者などが、世代や性別、職種、地域や立場を超えて出会い、語り合い、感動をともにしました。

ところで、今回のフォーラムは二つの大きな特徴があります。その最も大きなものは、博物館・美術館、図書館などの施設ボランティアといわれる人たちと、地域で音楽、演劇、美術などの分野で自立して活動しながら、まちおこし・地域おこしにかかわってきた人たち…この異分野の人たちが出会ったことです。

もう一つは、とかく省庁の委嘱事業という「金を出す口は出さない」という姿勢が感じられましたが、今回は文化庁がそこから一歩踏み出し、実行委員会の主体性・自立性を前提にしながら、プログラムに参加してくださるなどしっかりと関わる“新しい協働”の形を実現したことです。河合文化庁長官に、参加者とともに最初から最後まで関わっていただいたということも、官も民も“ともに学ぶ”ことを意味していました。

また、こういった特徴から実行委員のなかに、「世代を超えよう。とくに若者に活躍の場を!」、「文化ボランティアの見本市」というコンセプトが生まれていきました。大学院生2名が実行委員に参画し若者らしい行動力とITセンスで大人たちを引っ張り、当日はフォーラムサポーターとして多くの大学生たちが随所で活躍しました。会場に活気をもたらした大きな要因でしょう。また、「見本市」という単語はモノのようでちょっと違和感があるかもしれませんが、参加者の立場や関心もさまざまなので、文化ボランティアにはどんな活動があってどんな人たちがやっているのか、成功の秘訣は何かなど、まずは情報交換の場になってほしいと意図しました。

運営面では、限られた予算のなかミュージアム誌編集部がボランティアに事務局を担当してくれたこと、メーリングリストで短期間のうちに合意形成をはかったことも見逃せません。しかし、何といっても実行委員たちそれぞれが「初めての全国集會を何としても成功させたい」と自発的にユニークかつ手弁当の活動を展開したことが成功へと導きました。

今、なぜ文化ボランティアの全国フォーラムをやるのか…。出会いや発見で一人ひとりが感動し、元気になり、つながり、動き出す。それが地域や社会の活性化につながる!フォーラムの準備を通して、私たちは文化ボランティアへの新たな確信の数々を得ていきました。

さて、そうやって迎えた3月10日・11日…。さまざまな表現活動で社会参加したいという個性的な人々の集まりは、熱気や活気を掛け合わせたようで、明日への可能性を充分に感じるものとなりました。

ご支援・ご指導いただいた文化庁、独立行政法人国立女性教育会館、埼玉県をはじめ、ご協力いただいたスタッフのみなさま、それに何よりも参加者のみなさまに、実行委員一同、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

文化ボランティア全国フォーラム実行委員会

大久保 邦子



文化庁委嘱事業

文化ボランティア全国フォーラム2006

文化ボランティアが〈あなたと日本を〉元気にする！

～出会う・つながる・動き出す～

日時：3月10（金）、11（土）

場所：独立行政法人 国立女性教育会館（ヌエック）

主催：文化ボランティア全国フォーラム実行委員会

後援：国立女性教育会館（ヌエック）、埼玉県

事務局：（株）アム・プロモーション

プログラム

1日目（3月10日）

●公開フォーラム（14：00～17：00）

14：00～14：15 【オープニング】主催者挨拶ほか
司会進行：篠田信子（NPO法人ふらの演劇工房理事）

14：15～14：45 【貴重（な）講演】
「文化ボランティアで日本を元気に！」
文化庁長官 河合隼雄

15：00～17：00 【事例発表】
「いま、日本の文化ボランティアは…」
ナビゲーター：黒沢 伸
（金沢21世紀美術館エデュケーター）
八木 剛
（兵庫県立人と自然の博物館研究員）

●交流の夕べ（18：00～）

18：00～20：00 【交流の夕べ&情報交換会】
司会進行：藤田大悟（日本科学未来館ボランティア）
参加者自己紹介
フルート演奏 河合隼雄文化庁長官と参加者

21：00～ 【ナイトセッション】

22：00～ 【深夜スペシャルトーク】
お題：「市民と行政…文化ボランティアがつなぎ役」
ゲスト：常世田 良（日本図書館協会事務局次長）
松葉谷 温子（前・秋田市助役）

内容とプレゼンター

1. 「八雲国際演劇祭」と人づくり
園山土筆
（八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしぶえ代表）
2. 九州国立博物館のボランティア
糸井 茂（九州国立博物館交流課事務主査）
3. 本物に触れて！輝いて！
子どもの美術教育をサポートする会
津屋結唱子
（「子どもの美術教育をサポートする会」代表）
4. 学生ボランティアの展開 Live in Space Project
富樫 悟（東海大学2年）
木下 萌（上智大学1年）

定員：200名（但し、1日目の公開フォーラムのみ400名）
対象：全国の文化ボランティア、文化ボランティアに関心がある方、
施設、行政など文化ボランティアに関心がある方
参加費：一般3,000円 学生1,000円
情報交換会費：3,000円 宿泊費：2,200円（郵便振り込み）
（但し、公開フォーラムのみ 1,000円 当日払い）
文化ボランティア全国フォーラム2006ホームページ
<http://www.bunkavolunteer.jp/index.htm>

2日目（3月11日）

●分科会（9：00～12：00）

1. 学生ボランティアからの発信

コーディネーター：田島博樹

（日本科学未来館ボランティア）

パネラー：中澤久美（カタリバ代表理事）

2. 文化でまちづくり、人づくり

コーディネーター：田中弘子（弘前市市民会館館長）

パネラー：園山土筆

（八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしぶえ代表）

今 由香（弘前見探図）

3. 地域でこどものアートを支援する

コーディネーター：津屋結唱子

（子どもの美術教育をサポートする会代表）

パネラー：中山智子

（子ども劇場おやこ劇場埼玉センター）

石川尚子（東松山市唐子小説書部あかね会）

4. 公共文化施設とボランティア～市民・NPOが担う指定管理者制度って？～

コーディネーター：近藤真司

（大判「社会教育」編集長）

パネラー：田中国弘、安藤 寿

（NPO法人あだち学習支援ボランティア「楽学の会」）

河合良治（大田文化の森運営協議会委員）

5. 野外ワークショップ

「NWEC図鑑を作ろう！～発見・提案・企画・実行～」

コーディネーター：八木 剛

（兵庫県立人と自然の博物館研究員）

6. ミュージアム・ボランティアの課題と未来を語る

コーディネーター：鈴木章生（目白大学助教授）

黒沢 伸

（金沢21世紀美術館エデュケーター）

7. 市民活動支援の悩み相談室

進行役：大谷圭介（文化庁文化ボランティア専門官）

聞き手：奥山恵美子（仙台市教育長）

北島通次（埼玉県総合政策部文化振興課主幹）

井上 肇

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財記念物担当課主幹）

8. 文化ボランティア、そのマネジメントの極意を学ぶ

コーディネーター：柴田英紀

（鳥取県文化振興財団文化芸術デザイナー）

パネラー：篠田信子（NPO法人ふらの演劇工房理事）

青山織人

（サイトウ・キネン・フェスティバル松本ボランティア協会会長）

●みんなのかたり場「明日に向けて」 （13：00～15：00）

総合司会：廣瀬隆人（宇都宮大学教授）

アシスタント：藤田大悟 田島博樹

〈第一部〉分科会であったこと

〈第二部〉河合文化庁長官を囲んで

「文化ボランティアの未来！」～参加者とともに～
〈結びのことば〉

貴重(な)講演

文化ボランティアで日本を元気に！

文化庁長官 河合 隼雄



河合長官の講演で会場は一気に和やかに。「個人個人が考え動き、それがつながって新しい公になる」と参加者を勇気づけた

皆さん、全国からお集まりいただいて、大変嬉しく思います。

「文化ボランティア」というのは、私が長官になってからいい出した言葉です。始めに「文化の力で日本を元気に！」といい、それを日本中に広めるためには文化ボランティアが大事だと進みました。

皆さんご存知の阪神淡路大震災の時には、ものすごくボランティアが来られましたね。震災1年後に兵庫県の教育長は「若いボランティアがどれだけ阪神淡路の復興のためにやってくれたか分からない。大変感謝している」と挨拶され、非常に印象的でした。ところが、ボランティアを震災のときなど困っている時に助けにいくことだけだと思っている人がいます。私は、京都にいた時からこれが面白い、こんなことを皆でやろうじゃないかというボランティアがあるんだといったのですが、文化庁長官になり、文化ボランティアをやろうと声をかけました。本当に広がって、今日も全国各地から200人以上の方がこられて嬉しく思っています。

●ボランティアこそ細かい心づかいを

私はよくいうのですが、お茶漬け食べるのも漬け物食べるのもみんな文化なんです、と。そう考えると、文化ボランティアのできることというのは無限にあります。これからは私はどんどん増えてくると思っております。

ただ、ボランティアはやってみると案外難しいところがあります。本人はよいと思っていても、本当にいいことなのかと考え出すと難しい。

例えば、ボランティアの方たちが、福祉施設に行ってみんなでフォークダンスをやろうと「さあ、みんな出て下さ〜い」とやるんですね。それを高齢者の方がどう受けとめるか。「何にも面白くないけど、ボランティアの方がきてくれているし、奉仕しようか」なんてね。高齢者の方がボランティアになっているんじゃないのか。また、福祉施設にボランティアの方たちが行って、「はい、これやりましょう」、「助けてあげましょう」などとどんどんやると施設の方が「高齢者の皆さんが人に頼ることを覚えてしまっ、自分でやらなくなってしまう。あれは困りものですよ〜」となる。

人の役に立つというのはとても難しいことです。私の非常に好きな言葉に、『善を行うならば、微に入り細を穿ってやらなければならない』というのがあります。例えば、今は肩を貸して喜んでもらったがこれは本当に役に立ったんだろうか、一年後かえって悪くしてないだろうか、肩を貸さずに頑張ってといて立ってもらった方がよかったのかとか…などと考え出すと難しいですが、そういう細心の配慮が必要だということです。だから、皆さんボランティア活動しながら細かいところまで心を使いましょう。これを絶対に忘れないようにしてください。本人だけが喜んでいて、近所が迷惑しているというボランティアが時々ありますので、このことを心がけてほしいです。

●どんどん勉強したくなる嬉しさと「新しい公」

文化ボランティアの面白さは、やりだすといくらでもすることがあるし、どんどん勉強もしたくなる場所ではないでしょうか。ボランティアの方たちと話していると「我々が非常にありがたいのは、この年になってまだ新しく勉強できることです」と、よくいわれます。

奈良の平城京で説明しているボランティアの方たちは、もっと歴史を知ろうじゃないかと仲間で「しよくにほんき続日本紀」を読む会を作った。でも、いったい誰が指導するの？という話になった。すると県の職員があなた方はそれだけよくやって



公開フォーラムの「オープニング」では、独立行政法人 国立女性教育会館（ヌエック）理事長の神田道子氏より、心あたまる「ごあいさつ」をいただきました。

くださっているのでせめて講師料ぐらいはと、県が補助してくれたんですね。皆が頑張り出すと行政と皆さん個人が相互にとっても助け合う。行政と市民との交流が非常に多く起こっているということを私は非常に高く評価したいです。

実は、亡くなった小渕総理が総理大臣になられたとき、「21世紀日本の構想懇談会」を作られまして、私はその座長になりました。21世紀の日本の教育や経済、あるいは国語について委員会を作りました。どの委員会でも共通に出てきたのは、21世紀に日本人が本当にこの世界で生きていこうと思えば、個の確立、個人として自分を確立することが大事であるということでした。ただ、日本人にうっかり個の確立という話をすると、「これは個人の意志です」、「私は個人でやってますから」なんて、無茶苦茶をいう人が出てくる。だから、個の確立だけでなく皆が繋がる公へということを考えねばならないとなりました。我々が作ったスローガンは「個の確立と新しい公を作り出すこと」でした。なぜ「新しい」とつけたかという、今まで日本人は、上からパッと命令があってその「こうしなさい、こうして下さい」といわれてるのが「公」と思ってきた。だけどそうではないと思います。個人が集まってこうしようじゃないか、「うちの美術館はこんなふうに運営してはどうだろうか」、「うちの街に一つぐらい芝居するところがあっていいんじゃないか」ということを個人個人が考えて、それが繋がって公になってくる、と。だから、上からの公ではなくて、下からの公をつくるんだという意味です。

皆さんがやっておられる文化ボランティアは、まさにそれだと思っています。ものすごく嬉しいです。小渕総理のときに答申したことが、もうこういうふうに実現してくれる。みんな個人で「よし、ここの手伝いをしよう」とか、「これやろう」とか、「こんなことやったらどうだ」って、思っているうちにみんな繋がってくるわけですからね。

●世代を超えて、地域を超えてつながる

兵庫県の舞鶴に古いレンガの文化財になっている建物があるんですが、昔の写真では建物の間の道もレンガなんですね。土が積もってしまったからみんな土の道と思っているんだけど、その土をのければ建物も道もレンガで、すごく感じのいいところができる。そこでレンガの道を掘り出すボランティアというのをやり出した人がいます。始めは数人でしたが、どんどんどんどん集まって来る。その人に「どこがいいですか？」って聞いたら、世代の違う者が、つまり60才の人と中学生とが話ができることだと。確かに私が急に中学生に「近頃の中学生のこと、君、どう思ってるんや？」「中学生の殺人があったけどどう思う？」って聞いたら「別に」とか、「うるさい」とかいうでしょう。ところが、一緒に掘っているといいやすい。「なあ君、どう思う？」って、どんどん話が出てきてですね、心が繋がる会話ができてくる。それが世代やいろんな違いを超えて皆が心のつながりということを体験できる。

ここに集まった皆さんに、心がけていただきたいんですけど、まったく離れたところと繋がることもできるということです。「うちもやってるんですよ。あなたどこですか」「うちは岡山です」「私は千葉です」「一度一緒にやってみませんか」ってね。

皆さんのつながりができて、そして文化ボランティアの輪が広がっていくということを考えていただきたいと思います。

(まとめ・山下 治子)

事例発表 1

「八雲国際演劇祭」と人づくり

八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしぶえ代表
園山 土筆



パフォーマンスも交え演劇の魅力も伝える発表となった。左はアシスタントの有田美由樹さん



「第2回八雲国際演劇祭」のオープニングの様子。
8か国9団体が参加した



「第2回八雲国際演劇祭」の開催要項（左）と記録誌（右）

1966年、「劇団あしぶえ」は鳥根県松江市で結成されたが、当時「演劇」は認めてもらえる文化ではなかった。そのため、自分たちの力で〈演劇を人々の暮らしの中へ〉浸透させ、演劇の素晴らしさを広めたいと思うようになった。

1994年、「アメリカ国際演劇祭」に宮沢賢治原作の「セロ弾きのゴーシュ」を持って参加し「最高賞」を獲得した。このとき観客の反応のすごさと、ボランティアの輝くような活動を見て、国際演劇祭は〈演劇による地域づくり〉ができるのだ、と確信した。

●住民、行政、劇団の協働が必須

「自分たちの劇場を持ちたい」という長年の夢が実現して、隣接する八雲村の「しいの実シアター」に移った。1995年のことだった。132席のこのシアターを主会場にして国際演劇祭は開催できないか、と考えた。しかし、国際的な催事開催の絶対条件は、①潤沢な予算がある②交通の便がよい③ホテル・レストランがある④外国語のスタッフがいる⑤観光・文化資源がある⑥ホスピタリティがある、の6つだ。八雲村には⑤⑥以外はない。

そこで、①については寄付金・助成金を集め、②③④についてはボランティアとホームステイで対応しようと決めた。そして、「こんな田舎でなぜ国際演劇祭を開催する必要があるのか」という質問には、「21世紀は多文化社会。国際社会で生きていく力が学べます」と答えることにした。加えて、人口7,000人の小さな地域で国際的な催事を成功させるためには、「住民」「行政」「劇団」の三者が協働することが必須。しかし、三者は考え方も違うし、仕事の進め方も違う。それならば、共通認識が必要だ、というわけで「活動の指針」を作った。つまり、①多文化社会の到来を予測して②「演劇の力」を知り③三者が手をつなぎ④ディスカッションを惜しまず⑤プロセスを大切に改善を重ねる、という認識だ。ボランティアはお手伝いではなく、自ら企画し、準備し、開催して、徹底的に振り返りをすれば、自ずと次回のプランができ夢が広がる。このようなボランティアスタッフの体験は、自身の生き方、家庭、学校、職場、地域で活かされていく、という考え方だ。

●八雲国際演劇祭を支えたボランティア

さて、ボランティアスタッフが責任をもつ委員会は25あった。通訳、広報、ステージ、式典デザイン、劇評、登録、環境、設備などなど。輸送委員会は、片道6時間かけて関西国際空港へ行き、海外からの劇団員を八雲村まで輸送する。宿泊委員会は、ホストファミリーを集めて「多文化理解」を進めながら本当のホスピタリティとは何かを学ぶ。食事委員会は食文化、宗教、アレルギー対応などについて調べる。このように「文化ボランティアの視点」から見た「八雲国際演劇祭」は、①企画・立案から参加する②ハイレベルの作品を観劇し、感動を共有する③「多文化理解」の学びから生まれる真のホスピタリティを育てる④パブやパーティで各国の俳優・スタッフと交流し、楽しむ演劇祭だ。

こうして、通算3回目の「第2回八雲国際演劇祭」は、31か国43劇団から参加希望があり、8か国9劇団が上演し、609名のボランティアスタッフが活躍した。次の開催は、2007年11月。どうぞ、お越しください。（八雲村は2005年3月に合併して松江市となりました）

事例発表2

九州国立博物館のボランティア

九州国立博物館交流課事務主査
糸井 茂

●九州国立博物館ボランティアの誕生

2005年10月の開館に向けてボランティアを募集（定員250名）したところ、1都2府8県から、842名の応募があった。予想を大きく上回る数で、地元をはじめ多くの方が九州国立博物館（以下、「九博」と略）が誕生することを待望していた表れだと思った。また、50代以上の申し込みが多いことは事前に予測できたが、20代～30代が全体の29%に達するなど、歴史系の博物館にもかかわらず若い世代が高い関心を示し、レポート審査の結果、2005年5月29日に、293名の九州国立博物館ボランティアが誕生した。

●九博のボランティアとは

九博のボランティアの定義は、「自らの自由意思に基づき、九博のパートナー（協働者）として、博物館活動の支援推進のために知識・技能を無償で提供していただくこと」。もっとわかりやすくいえば、ボランティアが持っている良さを活かして、博物館環境の中で自己実現をしてもらうことである。特に、館とボランティアのパートナーシップを明確にするため、10の部会の代表者が集まる定例会で両者が直接意見を交換できる場を設定した。月に1回の会議だが活発な議論が展開され、館とボランティアの絆が深まっている。

●九博ボランティアの活動

九博の293名のボランティアは、4つの分野に分かれて活動している。展示解説部は、文化交流展示室（平常展）で展示物の解説をしている。教育普及部は、通称「あじっば」という広場で、ポルトガル、オランダを含めてアジア7か国の民族衣装、楽器、日用品、玩具等を五感で感じてもらうような工夫をしている。館内案内部は、日本語、英語、韓国語、中国語に分かれ、館内の主な施設を案内するコース、窓越しに収蔵庫を見学するバックヤードコースの説明をしている。開館から3月31日までの145日間に、485回延べ1万6,018人を案内している。環境部は、文化財を後世に残すという使命感に立ち、IPMウォッチング、IPMメンテナンス等の活動を行い裏方の分野で大きく力を発揮している。イベント部は、イベントの企画立案、実施と主体的に活動している。

●九博のライバルはディズニーランド

「皆さん、なぜディズニーランドだけが立地条件等が悪い中で、唯一右肩上がりにお客様が増えているかわかりますか」これは、顧客戦略というボランティア全体研修の中での講師の梶原日出男氏の話。この研修以来「九博のライバルは、ディズニーランド」を合い言葉に活動を展開してきた。「来館者満足だけに終わらせず、来館者にどう感動を与えるか」ということが大きな課題だった。アイコンタクトを取りお客さまのニーズに応えるため試行錯誤を繰り返した。そのようななか、開館から4月までの来館者数は133万人を記録した。ディズニーランドはその9割がリピーター。九博はそれには遠く及ばないが、何回も館に出向いていただけるお客さまもいる。その一つの要因に、館の最前線で温かく接してくれているボランティアの存在があることは確かだ。九博ボランティアは、今年度、3年任期の2年目を迎える。「来館者に知的好奇心をどう感じてもらうのか」「館の活動を学校教育で展開できないのか」等、すでに各部で活発な議論が始まっている。事務局も乗り遅れないようにについて行きたいと思う。



ボランティアたちのパワフルぶりを披露する



10の部会の代表者が九博職員と話し合う定例会



展示解説部は、文化交流展示室（平常展）で解説をする

事例発表3

本物に触れて！輝いて！子どもの美術教育をサポートする会

子どもの美術教育を
サポートする会代表
津屋 結唱子



会の活動に参加した学生たちは、そのときの感動をはつらつと語った



2005年6月、しがらきの里で行われた授業に河合長官が視察に訪れた。生徒の前でフルート演奏を披露し、その後合奏



子どもたちは自分で焼いた茶碗を持参し昼食をとった（2005年6月しがらきの里）

●一人ひとりとの出会いが活動の輪を広げた

文化ボランティアが学校・地域と美術館・芸術家、行政をつなぎ、国際交流へとその輪を広げる。2000年、「すべての子どもたちに本物の文化・芸術・伝統に触れる機会をつくることで、豊かな感性と心を育てる」を理念に活動が始まった。当時は難しかった学校と美術館・芸術家との連携を文化ボランティアが双方の意向や要望を調整することで先駆的な連携授業が実現した。2005年までに小・中・養護学校延べ30校・1万7,000人の生徒たちと地域の子どもたち1,000人に本物に触れる体験プログラムを実施した。子どもたちの普段とは違う輝く表情が素晴らしいと評価され、年々依頼校、継続校が増加した。毎日が「忙しい」ことにスタッフ一同幸せを感じつつも、次々に課題が見つかり、「連携」の奥深さと楽しさを痛感している。活動の中心は、学校と美術館・芸術家との連携コーディネートと当日の子どものサポートである。コーディネートを主とする活動のあり方からか、この数年は大学生の参加が増えた。

そもそもの始まりは、私自身、母親として「子どもたちの心を育てるためにどういった方法があるのか」とその答えを求めて模索していたことだった。そんななか世田谷美術館での教育普及プログラムに出会い、「美術教育」の中にその答えを感じ、「すべての子どもたちに本物との出会いの機会を与えるには、美術館と学校が連携するしかない」とひとり思い巡らした。その後、滋賀県へ移り住み、美術館にボランティアとして参加した。すると、滋賀県立近代美術館、県立陶芸の森、MIHO MUSEUM、県立琵琶湖博物館で、教育普及に関心の高い学芸員たちと出会った。さらに1999年12月、美術教育が専門の一人の小学校校長と出会う。彼女が「うちの学校でやってみて」とおっしゃって、ついに連携授業が実現した。一人ひとりとの出会いの重なりが、一つの学校からまた次へと、活動の輪が広がっていったのである。

●「一期一会」「十人十色」の体験プログラムづくり

本年7年目を迎えた。「連携をコーディネートする」活動に重点を置いてきたことで、多くの美術館・博物館、学校、地域（公民館など）、文化行政、教育委員会とのネットワークが広がった。美術館・芸術家の「提供できること」、学校・地域の「求めていること」を調整し、プログラムの内容検討を重ねることを一番重要としている。常に「一期一会」「十人十色」の体験プログラムづくりである。近年は、年間授業計画に組み込まれるなど学校の伝統となる定着型の体験へと発展している。2005年は、文化行政との連携による地域での新規事業をいくつか実施し、県内の文化施設と地域とのネットワーク化に向けて事業を展開している。この広がりへの支援となったのは、2003年より3年間いただいた文化ボランティア推進モデル事業の助成金や、昨年6月に視察された河合文化庁長官の励まし、学校関係者、文化行政関係者、そして「月刊ミュゼ」のような情報発信などがあった。本当に多くの方々に育てていただいたと、感謝している。さらに昨年12月には、国際交流基金によりトルコの小学校2校で文化芸術体験連携授業を実施した。地域活動から世界へと、美術教育を通じた文化ボランティア活動の夢は無限に広がる。活動を通して、多くの子どもたちの目の輝きに接することができた。特に心に痛みを抱える子どもの表情の変化は、会の大人たちを結束させる原動力である。また、参加した多くの学生が自己発見や喜びを実感したようだ。今後もさらに連携の輪を広げ、文化芸術を通じた次世代教育の支援の可能性を探っていきたい。

事例発表4

学生ボランティアの展開 Live in Space Project

富樫 悟 (東海大学3年)
木下 萌 (上智大学2年)

●コンセプトは「誰もが身近に“感じる”宇宙」

Live in Space Project (以下、「LiS」と略)は2003年度に設立された東京を中心に活動している学生団体である。

LiSのコンセプトは「誰もが身近に“感じる”宇宙」だ。宇宙というと、ロマンを追いかけている人たちが研究している私たちとは関係ないこと、宇宙開発や技術など難しく近寄りがたいこと…というイメージを持っている方は多いのが現状である。しかし、目を向けて見ると、実は宇宙は誰のそばにもあり、身近な存在なのだ。LiSは「宇宙」と「生活」の身近な関係を感じてもらうための“架け橋”となることを目指し活動している。

例えば耳式体温計がある。風邪をひいた際に耳に入れて体温を測るものだが、宇宙と深い関わりがあるのだ。この技術、実は天文学で遠くの恒星の表面温度——つまりある種類の星の温度を測る際に使われる方法と同じ方法で体温を測るのだ。星の温度を測る技術が体温を一瞬で測定する技術に応用されている。このように、LiSでは身近に隠された“宇宙”と“生活”の関わりを多くの人に伝えるために日々活動している。

LiSのメンバーは、宇宙というと理系をイメージしがちではあるが、工学、理学だけでなく、芸術、文学、商学と多岐に渡っている。様々な分野の仲間と議論することで技術的な面だけでなく様々な側面から企画を作っている。

●宇宙への興味を0から1へ変える活動を

LiSの活動は、大きく分けてウェブサイトでのオンライン活動*とオフラインでのプロモーション活動がある。

オンライン活動のテーマとしては生活に取り入れられている宇宙技術・宇宙利用の紹介をする「From SPACE…」、現在、または近い将来行われる宇宙旅行の紹介をする「To SPACE…」、後述する体感イベント「FEEL…」の案内・報告の3つのメインコンテンツがある。その他に各分野の専門家に宇宙と生活との関わりを聞く「Interview」や趣味を通じて宇宙を身近に感じるコラム集等で情報提供を行っている。

オフラインの活動としては、体感イベント「FEEL…」や宇宙授業等がある。体感イベント「FEEL…」は、楽しみながら身近に応用されている宇宙技術や近未来の宇宙旅行の紹介などをおこなうイベントだ。日頃宇宙や科学に触れるきっかけがない方や関心の薄い方が多いと思われるショッピングモールへLiSが赴き、五つの感覚(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)を使い体験する体感展示を開催している。宇宙食の試食、宇宙へ行った宇宙バラから作られた香水の試香、実際の宇宙旅行で使われている宇宙旅行パンフレット等の展示を体感していただき、実は身の回りの意外なものが宇宙と繋がっているのだ、ということを五感で感じていただいている。「FEEL…」に参加していただく来場者の多くが偶然立ち寄った方である。しかし様々な年代の方が展示に熱中し、スタッフへ質問責めするなどご好評を頂いている。

LiSの活動は宇宙や科学に日頃馴染みのない人に宇宙への興味を0から1へ変えることを目標としている。科学も文化の一つとして、楽しんでいただける場であることを知っていただきたいと思っている。最近では理科離れが問題視されているが、「FEEL…」に参加したことをきっかけに多くの方が科学に興味を持つようになればLiSの活動は今後社会に対してより有益なものになるのではないかと考えている。



発表は多くの参加者から「たくさんの元気をもらった」と好評だった



耳式体温計



体感展示「FEEL…」の風景

* <http://www.liveinspace.net>

交流の夕べ & 情報交換会

初日の夕方から行われた「交流の夕べ」は、まさに互いを触発し合う交流の場。会場となったレストランは熱気に包まれた。進行役を務める藤田大悟さんは、100人の方と名刺を交換しましょう！と元気に呼びかけ、スタートした。そしてここでもひと味違う趣向が準備された。河合長官のフルートとの共演である。担当職員によれば「長官はこのフルートの共演をとにかく楽しみにしていた」とのことで、その意気込みは大変なものであったようだ。当日は3人のフルート奏者と1人のサクソフォン奏者とで計6曲が演奏され、美しい音色が参加者の心にいつまでも残った。



「交流の夕べ」は多くの参加者の熱気と食欲、そして交流欲でいっぱい



藤田大悟さん（左）とフォーラムサポーターの井田明日香さん（中央）の司会でスタート！右は河合長官



翌日の分科会案内も行われた。第6分科会についてアナウンスする黒沢伸さん。右は第5分科会担当の八木剛さん



第7分科会について話す文化庁文化ボランティア専門官の大谷圭介さん





河合長官と参加者との夢の共演が実現。ほんのわずかな時間でのリハーサルだったにも関わらず、奏者の息はぴったり



河合長官を囲んで記念撮影する「子どもの美術教育をサポートする会」。長官の右隣が津屋結唱子さん



演奏を聴く人々に文化ボランティアとしての音楽ボランティアの大きさが伝わった



会場中に響き渡った美しい音色に拍手喝采の瞬間！

ナイトセッション 音楽ボランティアのこと、話そう

参加者それぞれのテーマで自由に意見を交換する場となったナイトセッション。「交流のタベ」がお開きとなつてすぐ、もっと語り合いたい！という思いの参加者が集った。テーマは音楽ボランティア活動。初めは14団体、25名程度の参加者だったが、次第に増えて50名以上に膨らんだ。四国、九州、東京、仙台、北海道…など、活動のフィールドは違えど、音楽に携わる活動を行っている人たち、あるいはこれからやっていきたいという人たちだ。交流のタベで披露された河合長官とのフルートセッションが、音楽を想う人たちの心を刺激したのかもしれない。

進行役をかって出たのは仙台国際音楽コンクールボランティアの三田雅子さんだ。当夜のことを振り返り「このセッションでの出会いが新しい動きに繋がっている」と語る。全国音楽ボランティア札幌フォーラム（2006年7月30・31日に開催）事務局長の赤石知恵子さんに、文化庁からの助成金が見られるのではないかと激励したところ、後日、赤石さんは仙台まで足を運び、見事に助成金の申請が通ったと吉報を告げ、さらにそのフォーラムの実行委員として三田さんも関わるようになったという。

いい情報もいい出会いから、ということだろうか。



テーマは「音楽ボランティア活動」。もっと語り合いたい！という参加者が集った
(まとめ・事務局)

深夜スペシャルトーク 市民と行政…文化ボランティアがつなぎ役

ゲスト：
常世田 良（日本図書館協会事務局次長）
松葉谷 温子（前：秋田市助役）



22時からのプログラムにもかかわらず、多くの参加者が集った



ゲストの常世田さん（左）と松葉谷さん（右）



参加者からの素直な意見や感想が各会場のボードを埋めた

ゆったりしたラウンジに、夜更けになっても疲れをみせない参加者が三々五々集う。「深夜に（このテーマは）ちょっときつすぎない…？」常世田さんのつぶやきが聞こえる。

浦安市中央図書館長から同市の生涯学習部次長1年で、約四半世紀の公務員生活にきっぱり別れを告げ現職についた常世田さん。相方は、1月に秋田市助役を退いたばかりの松葉谷さん。秋田市婦人会館非常勤というより市民活動が認められていきなり助役に抜擢され、このほど4年の任期を終えたばかりだ。二人に共通するのは壁の中（行政）と外の生々しい経験であり、市民感覚に裏づけられた揺るがない行動軸だ。トークは、昼間から受講していた松葉谷さんが河合長官の話などを話題にしながら、深夜ならではのホンネが語られた。

●究極のボランティアは…

「公務員を辞めたといわれるんですが、僕自身は非常勤として図書館に勤めてから約四半世紀、図書館員としての意識はあっても公務員という意識はほとんどなかったですね」と、いかにも図書館人としての矜持と厳しさに対峙してきた常世田さんらしい。「実は、僕自身ちょっと驚いたんですが、図書館の中から生涯学習部へ異動になったとき、ぼわーんとした公務員生活をまんざらでもないと思う自分がいたんですよ…（笑）」

それからしずかに、民主主義の原点を突きはじめる。そもそも、自治とは「大草原の小さな家」を想像すればわかるように、「はじめに保安官ありき」ではない。最初は学校、教会、図書館などを住民が自分たちで創って運営する。そのうち物騒になると、腕っ節のいい人を連れてきて保安官に雇ったり、教師や牧師など専門性が必要なものには専門職を雇う。だから住民が主導権を握る民主主義が根づいているが、日本では明治以来、役所＝“お上”が主導権を握ってきた。図書館も“お上”がつくる官立図書館であって、“公立”ではない。そもそも日本には官と民があり、公＝パブリックがないのだ。

それではどうすればいいか。住民が自分たちの地域は自分たちで守るのだという意識が育つことが先決。究極のボランティアとは市長や議員だったり、ロビー活動をする人たちで、自分たちの地域の社会資源を共有することだ…と、一気に核心に迫る。

●“役所は何でもできる”という幻想

「実は、私も助役になる前は、役所に入れば何でもできるという“幻想”をいだいていたんですよ」。“幻想”がほどなくわかったという松葉谷さんだが、同時に役所の限界と可能性もみえてきたという。

一見、旧態依然のような地方行政だが、行政改革、地方分権、情報開示といった一連の波は、役所の内外で少しずつだが確実に成果をみせている。「秋田でも公共施設一つをつくるにも、今は役所もワークショップを開いて、コンセプトや設計など住民との対話をかさね、協働の姿勢をみせている。変わるのがこわいという公務員も確かにいるが、市民とともにやっていかなければ立ちゆかないと気づきはじめた公務員もいる。今が改革のチャンスという気がする」と松葉谷さん。河合長官が“個の確立”に言及され、“新しい公共”をつくっていくのが文化ボランティアだといわれたことを引き合いにされながら、アメーバのように自由自在に行動するボランティアの力に大いに期待するといい、市民、文化ボランティアとしての自らの今後をかさねているかのようだった。

（まとも・大久保 邦子）

ポスターセッション

会場前や通路ではポスターセッションが開かれ、10近い団体が参加。それぞれの活動をわかりやすく伝えるもの、主催イベントへのお知らせ、メンバーの募集など、ポスターの内容もさまざま。色とりどりの紙面と熱いメッセージが会場を一段と盛り立てた。



全国音楽ボランティア札幌フォーラム。「さっぽろで会いましょう!」と呼びかける



2007年11月の第3回八雲国際演劇祭をお知らせ(左)。右は東工大サイエステクノの活動の様子。メンバー・大学支部募集とのこと



第3分科会でパネラーとして参加したあかね会の活動はここでも健在。下記コラム参照



あきクラシックコンサートのボランティア活動の様子(左)。「まちとアートをむすぶ」劇場づくりをしている札幌市のNPO法人コンカリーニョ(右)



群馬県にある富弘美術館での展覧会のお知らせ



元気な手作りポスターが会場を盛り上げた

アニメ『雲の学校』の上映

ゆったりしたラウンジの一角ではアニメ映画が放映された。原作は、フォーラムの会場となった埼玉県比企郡唐子出身の作家打木村治の長編自伝小説『天の園』(全6巻)の幼年期編。母のふるさとである武蔵野の豊かな自然の中ですごした腕白時代を描いたもので、子育てには、美しい自然、豊かな母の愛、ほどよい貧乏があればよい!という作者の思いが貫かれている。

1772(昭和47)年に発表されると、芸術選奨文部大臣賞・サンケイ児童出版文化賞などを次々と受賞するが、ときあたかも高度経済成長の物質的な豊かさの時代へと突入…。しかし、子育てに大切な環境が失われていくことに危機感をもつ地元小学校読書部時代から続く母親たちの活動がきっかけとなり市民活動に広がり、このほどアニメ映画製作に結びついた。以前から小説に感動し、アニメ化をあたためていたというアニメ映画の巨匠黒田昌郎監督も協力、市民団体のネットワークが支えた。現在、手作り上映会が地元を中心に大きな広がりをみせている。

(まとめ・大久保 邦子)



市民団体のネットワークが支えとなり、大きな広がりをみせる『雲の学校』

第1分科会

学生ボランティアからの発信

コーディネーター：田島 博樹（日本科学未来館ボランティア）
パネラー：中澤 久美（カタリバ代表理事）



学生が文化ボランティアにどうかかわっていき
べきか意見交換を行った

* katariba.net
http://www.katariba.net/

本分科会ではこれからの文化ボランティアの担い手となる若い層、特に学生に着目して、いかに文化ボランティアに関わり、継続的に活動できるのかを明らかにすることをねらいとした。ゲストに「カタリバ」代表の中澤久美さんを迎え、8人という少人数で議論を行った。当初、中高年の参加を見込んでいたが、実際は学生とその年齢に近い方が中心となった。

●学生とボランティア団体との関わり方

学生とボランティア団体との関わり方を考えるうえで、団体の形態を①社会人が運営の軸でそれに学生が参画する、②運営も学生が行う、の2つに分けることが有用であることがわかった。また、学生の関わり方は、A) 組織運営に参画する、B) 活動に参画する、の2パターンに分かれ、B) に参画する学生が多い（潜在的なボランティアの数が多い）ことが分かった。一般的に学生は自由な身分であり、自分の興味によりさまざまな活動を行う。また、試験や就職活動により多忙な時期があり、流動性が高い。ボランティアとしての定着度が低く、長期にわたるコミットが必ずしも確保されないという問題が生じやすいとも言える。①のような団体であれば、運営面での学生の参画は必須ではなく、B) パターンの学生の存在が重要である。よって、学生を長期定着させるより、出入りが激しくとも常に一定数の学生が存在する形を作ることが大切といえる。一方、②のような団体であれば、次代の運営主体を育てる必要性から、A) パターンの学生は必須であり、長期的に定着させる方策が必要となる。

●活動のきっかけとモチベーション

既存の団体に学生が入るきっかけはさまざま。友人や知人からの「口コミ」、大学へのポスター掲示やパンフレット配布、フリーペーパー作成といった勧誘手段がある。また、②であればサークルとして大学主催の新入生勧誘プログラムに参加することもできる。「ボランティア」という言葉には、“奉仕活動”や“介護や環境美化活動がメイン”といったイメージがあるので、「プロジェクトメンバー募集」としたほうがうまくいく場合もある。

入った後のモチベーションとしては、まず活動自体が楽しいことや、その活動に自分なりの意義が見出せることが重要である。また、その団体の学生ボランティアや社会人スタッフ等が魅力的な人たちだと継続性が高まる。加えて、“コミュニケーション報酬”という発想が大切だ。これは、ボランティアの話をきちんと聞き、情報発信の場を与え、会話し、褒め、またステージが上がるごとに新たな情報にアクセスできるようにする（入ってしばらくすると団体運営に関わる重要事項の相談を受けられるようになる等）といったコミュニケーションである。ほかに見えやすいゴールの設定も大切だ。例えば1回のイベントを活動の単位とし、本番終了がゴールとなるといったイメージである。明確な目標により、達成感・充実感が得られる。また、後輩の育成を通じて自らも大きく成長し、定着する学生も出てくる。

●学生を巻き込む意義

ボランティア活動に出会い、真剣になるものが見つけられた、自分の視野が広がったという意見が多かった。現実には、このような経験を経ず社会に出る学生は多いと思われる。だからこそ「視野を広げる」「物事に真剣に取り組む」きっかけとして、文化ボランティアを勧めることは大切であり、大きな意味をもつだろう。

（まとめ・田島 博樹）

第2分科会

文化でまちづくり、人づくり

コーディネーター：田中 弘子（弘前市市民会館館長）

パネラー：園山 土筆

（八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしぶえ代表）

今 由香（弘前見探図）

●お城とさくらとりんごのまち「弘前」の「^{ひろさきみたんず}弘前見探図」

どんどんやりながら変えていこうと、弘前の楽しさを伝えるテーマを見つけては、楽しみながら活動している。見探図とは津軽弁で“見たんですか”“見ました”の意味。現在は「津軽を楽しむ事典」の発行を目指し、多くの人に津軽の良さを紹介することにより、津軽の新しいライフスタイルを提供したいと考えている。

弘前市では、竹下内閣時代のふるさと創生基金1億円を、人づくりの種まきに使ってきた。「ひろさき創生塾・きらめき女性塾・青年プロジェクト塾」などなど。ひろさき創生塾一期生で「津軽を楽しむ事典分科会」を同じくした塾生の中から、5人が、1,000人アンケート・弘前見探図・^{よみやみ}宵宮見探図・ギャラリーネットワーク弘前「ぐるりあるいて新発見」マップ、音楽ネットワーク弘前のリーフレット制作。

地元の出版社・印刷会社をうまくまきこみ、行政とのつながりを大切に、途中休眠時代があっても、無理をしないで楽しみながら活動。現在、弘前ではその卒業生たちが、自ら活動する新たな場を自らの手で創造し、自らが企画立案し、率先して行動に移し、創造性のある活動を展開、そしてネットワークが広がっている。

●公開フォーラムで聴けなかった「八雲国際演劇祭」のすぐに役だつ極意

新しいことを始めるには、よそ者の風が必要。そして、「国際社会で通用する方法で準備する！」とか「3年で1,000万円貯める！」など、ドカンと大きいことから始めると、その四分の一くらいは実現するものだ。八雲は、この方法で夢を育ててきた。また、知らない人や行政と協働するときには、「同じ日本人でも文化がちがう」ということを認識して、「対等に」「平等に」という意識をもって進めることが大切。これは文化ボランティアスタッフ（八雲ではボランティアに必ずスタッフをつけている）にもいえることで、人間というものは、自分が大切にされているかどうかは、直感ですぐに見抜くものだ。演劇祭では、「パッション（情熱）」と「ミッション（使命感）」の両方を持っている人、汗を流す人、きちんと発言する人を探しながら輪を広げ、口コミでボランティアスタッフが609人になった。演劇祭の閉会式では、観客にボランティアスタッフの労苦を紹介し、感謝の拍手を贈るようにしている。

演劇祭を中心になって支えている「劇団あしぶえ」の公演時アンケートには、さまざまな情報が入っている。「観客は本当のところ何を欲しているのか」について質問内容を徹底的に吟味している。用紙だけでなくアンケート版と書きやすい鉛筆を添えることで回収率が90%を超える。上演後は、「アフタートーク」で演劇を身近に感じてもらうなど、マーケティング・リサーチしながらさまざまな工夫を実践しているが、これも感性・想像力・創造性を求められる「演劇」を学んでいるからかもしれない。

●出席者からの質問に答えて

財源の確保、行政にできない市民の立場の活用、情報やネットワークの広がりへの工夫、企画力・行動力の活動秘訣、行政との関係づくりへのアドバイスなど。

＊

「パッション」「ミッション」「対等・平等な関係を築くこと」「柔軟な対応と進化していくための工夫」などを大切にし、やり続けることだ。最後に全員で「第九」を津軽弁（な・ど・わ）の大合唱で終了した。

（まとめ・田中 弘子）



人間は自分が大切にされているかどうかは、直感で見抜く。「対等に」「平等に」という意識をもって進めることが大切だと確認し合う参加者たち



ひろさき創生塾の卒業生たちが制作したリーフレット



劇団あしぶえの入会のしおり。演劇によるまちづくりへの参加を呼びかける

第3分科会 地域でこどものアートを支援する

コーディネーター：

津屋 結唱子（子どもの美術教育をサポートする会代表）

中山 智子（子ども劇場おやこ劇場埼玉センター）

石川 尚子（東松山市唐子小読書部あかね会）



「ボランティアは正しい」という意識があると発展しない。大人が勝手に判断しないで、子どもに聞いてみるのが大事だとまとめた



陶芸の森にて子どもやきもの体験



トルコの小学校にて日本文化交流

最初に3人のコーディネーターが、それぞれの活動を紹介しながら話題や課題の提供を行った。その後、参加者一人ひとりから、活動報告や悩みの紹介などがあり、引き続いて意見や情報の交換を行った。

第一日目の事例発表を聞いて飛び入り参加してくださった人を含めて約18人の参加者だったが、異なる立場の人たちがボランティアを通じて心がつながる話し合いができたことが大きな収穫であったし、文化ボランティアの輪がどんどん広がっていく予感がした。

分科会は、話し合いを通じて共通の理解を進め、課題解決のヒントや糸口が得られればよいと考えていたが、その点では確かな成果があったようだ。

●出された問題点や課題

- ・「ボランティアは正しい」という意識があると、活動は発展しない。
 - ・ボランティアの本質は自分の生き方を問い直していくことであり、そこから遠ざからないようにしなければならない。
 - ・ボランティアを通じて、それぞれの思いをつなげていくことが大切である。
 - ・ボランティアは、大人にとっても「自分育て」の場になる。
 - ・地域に出ない子どもをいかにして文化に触れさせるかが課題である。
 - ・自分の人生にとって、子ども劇場の経験が軸になっている。これを次の世代に継承していかなければならないと思う。
 - ・子ども劇場は、いろいろな世代間のコミュニケーションの場であり、一体感を醸成する場である。
 - ・演劇のプロセスが人を変え、人づくり、まちづくりにつながる。
 - ・学校現場はかなり閉鎖的で、学芸員と学校との連携まではなかなかいかない。
- また、行政と文化ボランティアとの関わりについて、次のような意見が出された。
- ・行政は文化ボランティアなどの市民活動に学ぶという姿勢が重要である。
 - ・行政と市民の連携のあり方が大きな課題である。行政にはもっと市民の声を聞いてほしい。市民の知恵の力を吸い上げてほしい。
 - ・民間も行政ともっと突っ込んだ話をするべきである。
 - ・行政と市民との役割分担の線引きをうまくやっていけばいい。

●今後の展望や提案

- ・「青少年に本物を」をスローガンにすると、県民や議会の理解が得られやすい。
- ・青少年をターゲットにすることは、実は多世代を対象にすることにつながる。
- ・大人が勝手に判断しないで、子どもに聞いてみるのが大事である。
- ・何をしたいかが共有できれば、知恵が出てくるものである。
- ・現場重視の考え方を共有したい。
- ・全ての「隙間」に学生ボランティアが入れる可能性を感じている。「飛び石」のような存在になれる。
- ・いいこと（社会貢献活動）をしていれば、行政もサポートしてくれる。

最後に、河合文化庁長官から、「地域（生きている場所、立っている所）の力をうまくもっていけば成功するし、東京のマネをしたら失敗する」とのアドバイスをいただき、参加者一同とても勇気づけられて、分科会を終了した。

（まとめ・津屋 結唱子）

第4分科会

公共文化施設とボランティア

～市民・NPOが担う指定管理者制度って？～

コーディネーター：近藤 真司

(大判「社会教育」編集長)

情報提供：河合 良治 (大田文化の森運営協議会委員)

田中 国弘 (NPO法人あだち学習支援ボランティア「楽学の会」理事)

安藤 寿 (同会員)

第4分科会は、指定管理者制度の導入をきっかけとして、住民に望ましい今後の公共文化施設とはどんな施設か、また住民は指定管理者制度をどのように見守っていくのかをみんなで考えてみようということを趣旨とした。参加者は、文化ホール、公会堂、生涯学習センター、男女共同参画支援センター、視聴覚センターなどの施設設置関係者やそこで活動するボランティアなどの約40名で、椅子が足らず、立ちっぱなしの参加者もいた。指定管理者制度への関心の高さをうかがわせた。コーディネーターは大判「社会教育」編集長の近藤真司さん。二つの事例発表をきっかけに、各地のさまざまな施設の活動例や課題が堰を切ったようにとびだし、会場は熱気に包まれた。



会場は参加者でいっぱい。指定管理社制度への関心の高さがうかがえる

●指定管理者の応募へ意欲をみせるボランティア有志も

まず、河合さんから東京都大田区の区民文化活動支援施設「大田文化の森」の指定管理者に財団法人大田区文化振興協会がなったことが紹介された。施設の管理などは財団が行うが、イベントなど事業の企画・運営は区長委嘱の区民ボランティアの大田文化の森運営協議会と任意登録ボランティア・文化プレーヤーが担当することになった。そのなかで、任意登録ボランティア有志で設立したNPO法人文化活動支援機構フォレストが、3年後に迎える指定管理者の応募に意欲的だという注目すべき発表もあった。

次に、田中さんは、東京都足立区の地域学習センターの指定管理者制度導入について発表した。区内にある13の地域学習センターのうち5か所が民間企業、残りが出資法人の指定管理者となった。学習支援ボランティアは、区民の学習の場であるセンターの管理運営が企業になった場合、学習の場はどう変わるのだろうかを学ぶ「指定管理者制度学習会」を4回も開催した。この学習会によって、いろいろな問題・課題を自主的に学習することの大切さを学んだという成果が発表された。

参加者からは以下のような質問や意見があった。

- ・地域で男女共同参画活動に参加しているが、施設の管理を社会参加経験の少ない女性にもできるのだろうか。
- ・NPO法人が管理者になる覚悟を決めるのに3年間かかった。
- ・行政と市民ができることの棲み分けをしていく必要がある。

また、提言として、①地域を変える施設にすることが制度の一つの使命である、②意味ある制度にするためには力のあるNPOと行政の連携が必要である、③NPO法人が管理者になる場合、人材バンクを設けて市民に登録して貰う、などであった。

さらに、これらをまとめるものとして、「地域を変える」「公共性の確保」「参画の意識」のキーワードをみんなで決めることができた。

今後の公共文化施設は、指定管理者制度導入によって効率性や経費削減だけを優先する施設ではなく、住民に魅力ある、親しまれる、住民ニーズに対応できる地域住民のための施設になるよう、一人ひとりが身近な問題として注視していかなければということを痛感した。また、指定管理者制度は地域の問題であり、NPOの連携による指定管理者制度についての講座・学習会を催していくことも提案された。

(まとめ・市川 茂敏 (NPO法人あだち学習支援ボランティア「楽学の会」))

第5分科会

野外ワークショップ「NWEC図鑑」をつくろう！

～発見・提案・企画・実行～

コーディネーター：八木 剛
(兵庫県立人と自然の博物館)



広い敷地内の茶室の縁側で一休み。「営業活動もボランティアの仕事か」と議論がはじまった



「NWEC図鑑」のひとつ。参加者が思い思いに見つけたものをカメラで撮影



チョウも発見。散歩の時間と体験の共有が、議論のしやすい雰囲気を生んだ

●外へ出てみたかった…企画の趣旨と目的

施設職員（私）にとっては、利用者サービスの向上が第一の目標で、そのためにとりうる手法の一つが、ボランティアとの協働である。ところが、職員とボランティアとではワークスタイルがまったく異なるため、職員が担当している業務に近い領域での協働には軋轢が生じやすい。そこで、協働の領域を少しその外側にシフトさせると、「競争的排除の原理」がはたらかず、両者は平和に共存でき、結果的に利用者サービスが向上するだろう。

そこで、本ワークショップは、NWEC（国立女性教育会館）の、主たる機能でない部分＝敷地に着目し、ボランティアの視点でさまざまな魅力を発見し、具体的な来館者サービスプログラムの企画立案を行い、職員とボランティアの協働に関して理解を深めることを目的として企画した。

というのは建前であって、じつは、私は、NWECに来るたびごとに、研修室の窓から見える武蔵野の雑木林が気になってしかたがなかった。今回、私自身に企画をおまかせいただけたから、このチャンスを活用し、屋外に出ない手はなかったのである。

●散策効果

であるからして、理屈はともかくとして外へ出ましょう、ということだ。うららかな陽気のもと、9名の参加者とともに、午前10時すぎに会館研修棟前を出発。敷地の最も外側のルートをぶらぶら歩いた。さっそくに小鳥や春の草花が出迎えてくれ、テントウムシも歩いていて、春を満喫。各自思い思いに見つけたものをカメラにおさめていった。

広い敷地をほぼ一周し、日本庭園横の茶室の縁側で一休み。参加者のお一人が飲料をふるまってくださり、細やかな心遣いに感服。ここで、「NWECは独立行政法人化を契機に集客に熱心になり、ボランティアも宣伝などに協力するようになった」という話が紹介された。これに対し、別の参加者から「そのような営業活動は職員がすべきことではないのか？」と疑問が提起され、熱のこもったボランティア論がほとぼしるようになり始めた。出てきたキーワードは、ブランド性、経営判断としてのボランティア導入、法人理事会への参画、対等にモノがいえるボランティア、サービスの質、協力スタッフか学習者か、等々である。

気がつけば、もうお昼前。慌てて研修室へ戻り、とってつけたようなまとめを行なった。野外散策のコースを半分にすれば、きちんとまとめを議論する時間がとれたことは確かだが、逆に、お決まりのメニューをこなす、研修ごっこになってしまったかもしれない。散策の時間と体験を共有することで、参加者どうし議論のしやすい雰囲気ができ、茶室縁側での中身の濃い議論につながったのかもしれない。春の陽射しや薫る風は、過激な意見すらも和らげてしまふ、不思議な効果があるようにも感じられた。

(まとめ・八木 剛)

第6分科会

ミュージアム・ボランティアの課題と未来を語る

コーディネーター：鈴木 章生（目白大学助教授）
黒沢 伸（金沢21世紀美術館エデュケーター）

第6分科会は、施設ボランティアとしてのミュージアム・ボランティアの活動について、参加者それぞれの現場からの課題提出、それに対する意見交換が行われた。その間に、コーディネーター（黒沢）による金沢21世紀美術館の準備・開館へ向けての活動の事例から、ミュージアム・イメージそのものに対する提言を挟み込む形で進行した。参加者は、実際にボランティアの立場で現場にいる方、美術館・博物館等の職員の方がそれぞれ全体の3割ずつ、他に、行政関係者と学生を併せて3割の他、民間やNPOで活動する方、ボランティア活動のプロフェッショナル・コンサルティングの方とで残りを占めた。



「コミュニケーションの重要性」という言葉はここでも非常に多く聞かれた

●ボランティア草創期から変わらない問題点や課題

参加者から出された課題には、次のようなことがあった。「館（組織）とボランティア（個人）の間に擦り合わせできない考え方の違いがある」「ボランティア間でさまざまな意識の差がある」「職員間でボランティア活動に対する認識の差が大きい」「任期が必要である／任期は設定すべきでない」「応募者が少なく困っている」「広報のための良い方法はないか」「どのような研修の内容、方法が良いのか」「ボランティアでボランティアを運営してゆく可能性はないか」などである。



「私たちはなぜミュージアムを持つのか」という存在根拠を問う議論へと発展した

こうした一連の課題は、思えば、美術館や博物館におけるボランティア活動の草創期から同じように存在したものと言ってもよい。確かに、美術館や博物館におけるボランティア活動の状況は変わりつつあるが、その最も大きな変化とは、何よりそうした活動の事例数の増加、ということかもしれない。言い換えれば、施設ボランティアの活動が抱え込む問題＝どこにでも起りがちな問題が、まさにあちこちで発生している、ということなのだろう。そして、課題や事例数の増加を、“機が熟しつつある”と見ることも可能と思われる。そろそろ「本当は何が問題なのか…」、それぞれの課題や問題の表面には見えづらい、底に潜む根本的な問いに向き合うことが必要なのではないか…そして抜本的な問題の解決、いや、この言い方は正しくない…むしろ飛躍的な、新しいミュージアム像のイメージングとその実現が期待されているはずだ。

●浮き彫りになるのは“人間”同士の信頼関係の希薄さ？

実際、提出されたさまざまな課題をかえりみると、マネジメントの技術で解決する方法もあるのだろうが、むしろ、他者、あるいは“人間”に対する肯定／否定、あるいは信頼／不信、の“感覚”に、その問題の根本があるようにも感じられた。「コミュニケーションの重要性」という言葉が、この分科会の中で何より多く聞かれた“キーワード”であったことは印象的である。

一方で、私達はい、問題の解決のために何かしらの「方法」を見つけようとしがちだが、時として、そうしてできる「システム」や「きまり」そのものが、（自動販売機がそうであるように）人同士のコミュニケーションを遠ざけてしまうことについては、何度でも思い出す必要があるかもしれない。いろいろ問題は多いとはいえ、“みんなで作る美術館・博物館”という観点で見れば、さまざまな課題もまた、みんなで作り出しているわけだ。時間がかかるにせよ、丁寧なコミュニケーションこそが求められている…そのような結論が導き出された分科会となった。

（まとめ・黒沢 伸）

第7分科会 市民活動支援の悩み相談室

進行役：大谷 圭介(文化庁文化ボランティア専門官)
聞き手：奥山 恵美子(仙台市教育長)
北島 通次(埼玉県総合政策部文化振興課主幹)
井上 肇
(埼玉県教育局生涯学習部文化財課主幹)



市民と行政の相互理解の大切さ、コミュニケーションの図り方が話し合われた

●実践的な意見交換の場

第7分科会は「市民活動支援の悩み相談室」をテーマに、聞き手として上記の行政に携わる者があたった。フォーラム出席者より16名の参加を得た。

分科会では、豊かな市民社会を形成するために市民と行政はどうつきあっていくべきか、文化ボランティアがやりがいを持って参画していくにはどうしたらよいかなどを参加者が自分の経験に基づいて発表しあう形で意見交換を行った。そのうえで、聞き手の奥山さん、北島さん、井上さんからコメントをもらい、さらに議論を深めた。

出席者には、文化ボランティアの実践者、文化ボランティアを「活用」する側の行政職員や財団職員、学生ボランティアなどさまざまな人々が集まったことから、それぞれの視点と経験を踏まえた実践的な意見が多く提示された。そのなかで、協働としての立場でありながらも「民と官」の温度差が大きな課題として浮かび上がり、行政にとっては「感謝」、文化ボランティアにとっては「やりがい」がキーワードになるとの考えが共有された。

また、行政職員の意識改革が進まず、「ボランティア」を低く見たり、無償の人員とみなしたりする者がいる、文化ボランティア自体に閉塞感が広がっている、ボランティア団体が自立できずにいるとの現状報告がなされたほか、行政はボランティアに期待することをはっきりと明示することで役割分担すべきとの意見や、ボランティアをコーディネートする役割を担う人の育成が大切との意見も示された。

●市民と行政のコミュニケーションのあり方

最後の20分間は河合長官も参加し、「良いことにはすべて危険性が内包されている。市民と行政職員がコミュニケーションすることは意見のぶつかり合いであり、意見対立を恐れてはいけない。文化ボランティアは金では買えない責任を負うことでおもしろいことを実現するところに醍醐味がある。ボランティアに行為の意味を理解してもらい、誇りを持って実践してもらうことが大切だ」との考えを示された。

市民活動支援の悩み相談室というテーマのため、行政関係者が多くなるかと思われたが、実際はボランティア実践者の肉声を多く聞くことができたうえに、行政職員の立場としての本音に近い発言もみられたことから、ボランティアと行政職員の相互理解の大切さやコミュニケーションの図り方も話題となり、出席者それぞれが得るもののある分科会となった。こうした忌憚のない意見交換の場が、市民と行政の様々な交流・協働の機会に設けられることが大切ではないかと思われた。

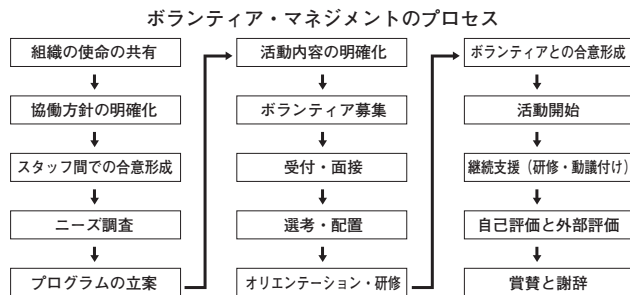
(まとめ・大谷 圭介)

第8分科会

文化ボランティア、そのマネジメントの極意を学ぶ

文化ボランティア活動が急速な高まりを見せ、文化ボランティアを楽しむ人口が急増するなか、ボランティアの潜在力を引き出しそのエネルギーを具体的な行動に結び付けていくマネジメントの習得が早急に必要である。また、ボランティアの行動は自発的であるがゆえに揮発的でもあり、一人ひとりの思いや活動をいかに持続あるものとしていくかもボランティア・マネジャーに課せられた重要な課題のひとつとして考えられる。

これらの課題を解決しながらボランティア活動を運営していくためには、「ボランティア・マネジメント」という運用スキルを学び、実践していくことが重要である。ボランティア・マネジメントとは、ボランティア自身が持つ個性を尊重しつつ、その持ち味を最大限に発揮し、組織の中で生き生きと活動ができるようにすることであり、組織にとって効果的で効率よくボランティアが活用できるように、そして、成果としてボランティアが組織の使命(ミッション)に寄与し、組織の可能性を広げる存在となるように、ボランティアという「人財」資源をマネジメントしていくことである。



本分科会では、文化ボランティアの育成課題や導入後の問題点を明らかにしたうえで、ボランティア・マネジメントの概念を参加者全員で共有した。次に、早くから事業のなかにこのマネジメントを組み入れ、ボランティアを育成しながらプロジェクトや施設運営を成功させている、NPO法人ふらの演劇工房(北海道富良野市)とサイトウ・キネン・フェスティバル(以下、「SKF」と略)松本ボランティア協会(長野県松本市)の事例をもとに、ボランティア・マネジメントの実践を学んだ。

●ふらの演劇工房のボランティアによる施設運営

「北の国から」などで知名度を得た「富良野」にもう一つ付加価値を付けたいという思いで始まった地域に根ざした文化活動は、「演劇のまち 富良野」を目指して市民の熱意あるボランティアなエネルギーで動き出した。1998年にNPO法人第一号を取得し、2004年にはNPOとして指定管理者第一号となり、現在は理事を始めとするボランティアらで劇場の経営を行っている。その経験からマネジメントのノウハウを学んだ。

●SKF松本のボランティア組織論

小澤総監督が率いるSKFは世界中から超一流の音楽家たちが集まる巨大な音楽の祭典。そのフェスティバルを支えているのが、登録者数800人を超えるボランティアたちである。「昔氏子、今ボランティア」ということで、ボランティアはサイトウ・キネン祭りの氏子になっている。行政とのパートナーシップ、活動資金の調達方法、公募性と非公募性など、大勢のボランティアを運営、組織していくテクニックやマネジメント方法を学んだ。

(まとめ・柴田 英杞)



ボランティア・マネジメントの概念を参加者と共有した



ふらの演劇工房の活動。公演時に託児の場を提供している



ふらの演劇工房では、劇場のまわりを植樹し訪れる人の目を楽しませる活動も行う



登録者800人を超えるボランティアがフェスティバルを支える

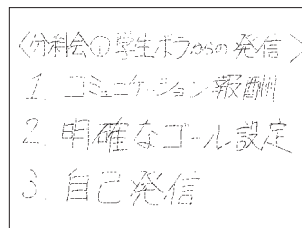
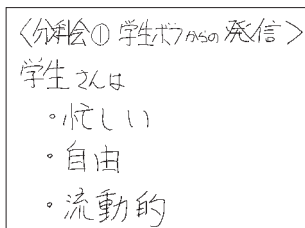
みんなのかたり場「明日に向けて」

〈第一部〉分科会であったこと

2日目の11日は、午前9時から、テーマごとに8つの分科会に分かれて語り討議したが、午後1時から再び講堂に全員が集まった。第一部では下記のメモをスクリーンに投影させながらそれぞれの分科会での内容を発表しあった。

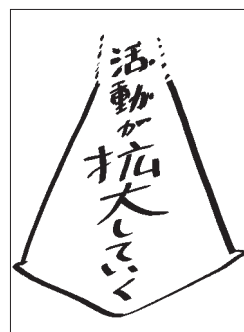
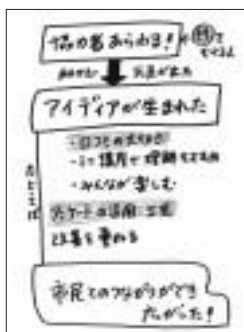
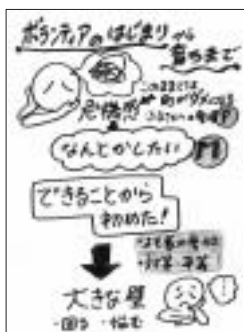
〈分科会1〉学生ボランティアからの発信

学生を取り込むキーワードとして、「コミュニケーション報酬」「明確なゴール設定」「自己発信」の3点があげられた。なかでも「コミュニケーション報酬」とは、ほめる、本当に良かったよねと確認し合うことであり、金銭的なものが必ずしもモチベーションを上げるとは限らないとの指摘があった。



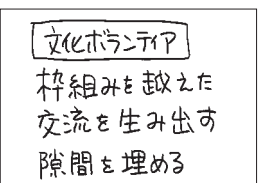
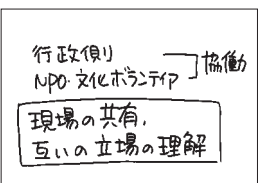
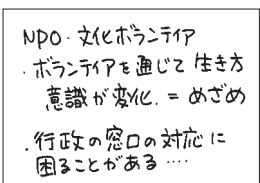
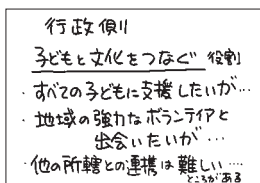
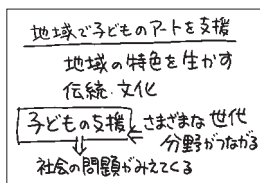
〈分科会2〉文化でまちづくり、人づくり

どのように市民の文化ボランティアが育っていったか。そこでは「パッション」(自分たちのまちへの情熱)、「ミッション」(自分たちにできることをやる)、「対等・平等な関係を築くこと」、「柔軟な対応と進化していくための工夫」などの大切さがあげられた。効果的なアンケートの作り方のアドバイスもあり、最後は全員で「第九」を津軽弁で大合唱した。



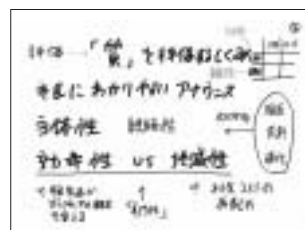
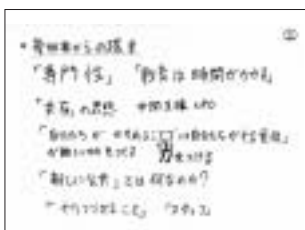
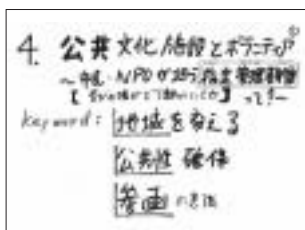
〈分科会3〉地域で子どものアートを支援する

参加した行政側とNPO、文化ボランティア側との対話という形になった。行政からは「多くの子どもたちを支援したいが、現実はいつも同じメンバーになる。強力なボランティアと出会えない」との悩みがあり、文化ボランティアからは「頑張っているが行政の理解が得られない」といった声。最後は現場を共有しながら、できるだけのことをしようとの一致をみた。



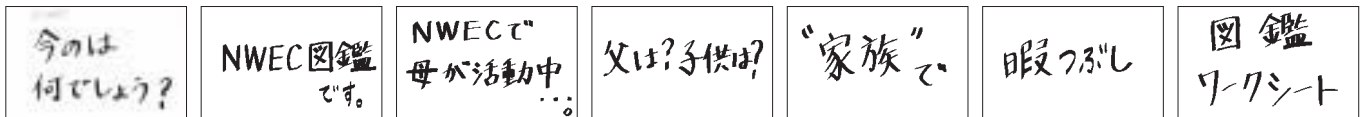
〈分科会4〉公共文化施設とボランティア

指定管理者制度をどう考えるか、市民、NPOがどのように対応できるか。大田文化の森運営協議会など2つの事例が発表された。また施設の運営形態への関わりでは、「継続することの大切さ」「スタッフの質の問題」「どのように専門性を評価していくか」などが課題に上がった。



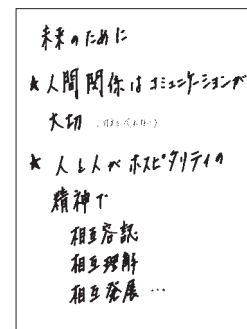
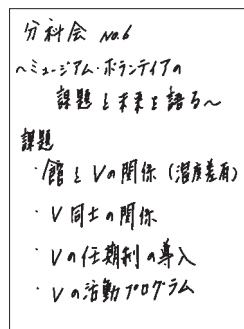
<分科会5>野外ワークショップ「NVEC図鑑をつくろう！」

唯一のフィールドワーク型の分科会。ヌエックの敷地内を散策して参加者一人ひとりがベストショットをデジカメで撮影し、それをもとに「NVEC図鑑」を完成させた。話し合いでは、「ボランティア活動中にその家族は何をしているのだろうか」という疑問が出て、家族みんなで過ごすヌエックの時間がテーマとなった。



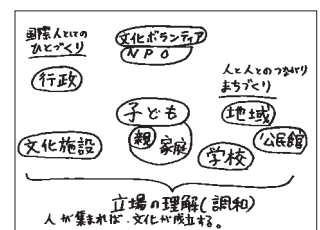
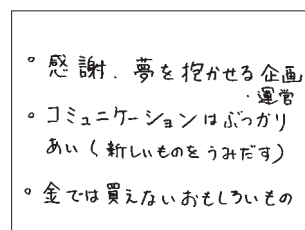
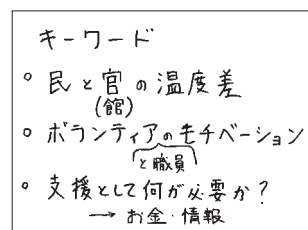
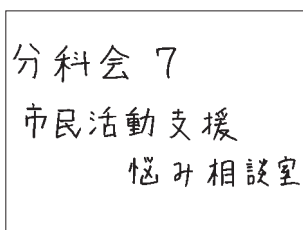
<分科会6>ミュージアム・ボランティアの課題と未来を語る

参加者を5つのグループに分けて3～5名で話し合った。「館とボランティアの関係に温度差がある」「ボランティア同士の年差」「ボランティアの任期制」などが話題となり、「コミュニケーションが大切」「意見を対立させてより良いものを生み出していくことを目指すべき」「対立も重要なコミュニケーションである」といった意見がでた。そして相互発展、相互容認、相互理解の大切さを確認した。



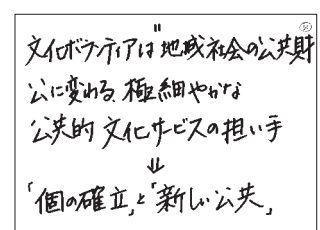
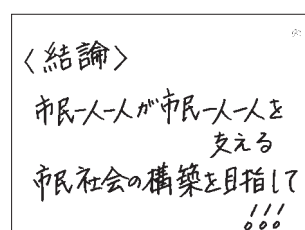
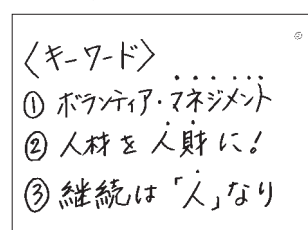
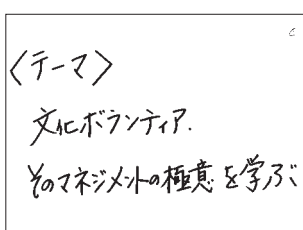
<分科会7>市民活動支援の悩み相談室

問題点として、「ボランティアへの理解に温度差がある」「モチベーションの維持」「情報提供の重要性」などがあがった。それに対し、「感謝の気持ちや姿勢をボランティア側に伝えていくことの大切さ」「夢をもてる企画や運営の仕方を工夫」「ぶつかり合いの中から新しいものを生み出す努力」などが強調された。



<分科会8>文化ボランティア、そのマネジメントの極意を学ぶ

文化ボランティアの個性を生かすマネジメントについての報告があり、「ボランティアを育成することは地域の貴重な財産である」といった意見が出され、「これからは市民一人ひとりが地域社会の構築を目指していかなければならず、その大きな力として文化ボランティアがあるのではないか」との結論を得た。



みんなのかたり場「明日に向けて」

〈第二部〉「文化ボランティアの未来！」～参加者とともに～



司会は廣瀬隆人さんからいつものまにか、学生の田島博樹さん、藤田大悟さんに引きつがれた



感無量で結びのことはを述べる実行委員長の大久保邦子さん

司会 どのような出会いや、発見があり、明日への足がかりが見つかったか、参加者の方からお話を…。

- ・東工大サイエンステクノという理科の実験教室をやっている団体ですが、ライブインスペースと望遠鏡のイベントを一緒にしたい。ぜひ具体的に話したい。
- ・異質な団体や組織、行政やボランティアなど立場の違う方が集まったが、それぞれの思いや課題を話すことで、自分たちの活動へのヒントがたくさんあった。全国的な集まりだからこそ、だろう。
- ・札幌からの参加だが、来た甲斐があった。周囲でボランティアをやっているのは私と同じで年配の方が多い。新しくやろうとしたことも、型にはまっていたのかもしれない。若い方たちが活躍し、このフォーラムを作り上げるのを目の当たりにし、交流会で話したことで彼らの自由な発想を学べた。次の活動に繋げていく自信となった。
- ・日立市で影絵の人形劇を30年やってきた。今回、29年間活動している人形劇団グルッペさんにお会いし、後継者育成や今後のことなど共通の悩みが相談できた。今後も手を携えて、相談しながら進んでいける勇気をもらった。
- ・残りの人生を少しは社会のためにという思いで、東京都中央区の文化財サポーター養成講座を受講し資格を得た。いろいろな方と交流したことで、今まで仕事にばかり追われていた自分をしみじみ感じた。世の中もボランティアも確実に進化していることを知れただけでも、生きてて良かったと思う。今日集まった方々が中核となり、ボランティア大学あるいは大学院を作り、組織人の強化を進めてほしいと感じた。
- ・終わってみて“文化ボランティアの見本市”という表現に納得した。そして何十年にも渡ってこだわって生きてきた人たちがこれだけいることを知り、日本もなかなか捨てたものじゃない、多様性を認められる社会が徐々に近づきつつあるのだと感じた。単なる見本市で終わらず更なる刺激の交換となっているのは、各々が各々の場所で活動してきたうえで集まるからこそ。今後のフォーラムも、人間としてこんなに素晴らしい人が日本に生きているんだと実感して帰れる、それが自分のエネルギーになっていくものを期待したい。(松葉谷温子さん・深夜スペシャルトークゲスト)
- ・昨日ラウンジで上映した映画「雲の学校」の舞台、唐子という地域で本の読み聞かせや「天の園」という本に関わりながら25年あまり活動してきた。今回、初めて自分たちも文化ボランティアなのだと知った。自分たちの子どもや孫のためにと思い、ささやかに活動していることが、点と点を結ぶ「結節点」になりうるのだと、認められた嬉しさで胸がいっぱいだ。地元で自分たちのためにやっていくことも大事だと再確認できた会だった。(唐子小読書部あかね会の石川尚子さん・分科会3コーディネーター)
- ・国立女性教育会館でボランティアをしている。分科会8に参加した。資金不足であっても文化ボランティアをやりたい場合どうするかを考えていた。今回、それを一緒に考えていこうと声をかけあった、松代の牛越さんとの出会いがあった。また、パネリストの青山さんと篠田さんからは、文化活動の資金集めのヒントを頂いた。
- ・河合長官との、それもたった4名のフルート共演だったので大変なプレッシャーだったが、長官がものすごく熱心に楽しんでいらっしゃる姿に感動した。次回はもっといろんな楽器での共演になればと思う。
- ・河合長官の文化ボランティアの提唱から3年間の間で、本当にさかんになったと実感している。この分野は、単なるボランティアや市民活動の枠におさまるものではない。ありとあらゆる活動や一人ひとりの気持ちが社会を変えていく力に成りえると私は考えている。それが文化を通じて行われるとき、文化ボランティアとなるのであり、それが社会を変えていく一つのきっかけになれば良いと思う。ぜひその輪を各地域で広げていただきたいし、私も放送の立場でそれを提唱していければと考えている。(NHK解説員の田村孝子さん)

司会 一参加者として同席してこられた河合長官へ、参加者の皆さんと同じ質問から。この2日間での長官にとっての出会いとは？

河合 参加者とのフルート共演。初対面同士が集まって一つのことをさっとやり遂げられる、文化ボランティアの力をとても象徴的に表しているなと感じた。

司会 分科会のほぼ全部に回っていただいて、長官が印象に残った言葉はありましたか？

河合 まず「ハコものに血をかよわせる」という表現。日本中のたくさんの文化のハコに、血をかよわせるのが文化ボランティアだという考え方。それから「トラブルは人を成長させる」という言葉。これまでの日本的な組織とは違うことを文化ボランティアはやろうとしている。上から言われた通りに頑張るのではなく、これからは、横に繋がったりまったく異質なものに繋がってやっていこうとするのだから、トラブルはあって当たり前。しかし、このトラブルがあるからこそ人を成長させる。心にとめておくべきことだろう。

司会 これからの文化ボランティアの兆しについて何か感じたことはありましたか？

河合 ここ2、3年の間でどの活動も工夫や苦労を重ねてきめが細かくなってきている。こうして同じように頑張る人の話を聞いて誰もが勇気づけられている。やっていることは全然違っても、根本に動いているものが共通だから、聞いて面白。そしてやる気や勇気が与えられるのもすごく大事なことです。会場で強くそれを感じた。

司会 長官ご自身が刺激を受けたり、元気づけられた？

河合 ここまで皆さんが活動が続けて、この会が実現したことで、本当に元気づけられた。私もどんどん頑張って文化ボランティアのことを言っていきたい。

司会 繰り返し出てきた「官と民」については？

河合 教育にしても経済にしても「官」の主導のやり方は、ある意味では大きなプラスをもたらしていたのは事実。ただし、それだけが大事なのではない。皆さんの活動は日本の文化の保護ではなく、前段階を超えて革新させようというもの。そういう意義あることを自分達はやっているという意識を持っていいと思う。

また「官は頭がかたい」かどうかはやってみないと分からない。やる気になれば結構面白い考えを持っているもの。堅い人と柔らかい人が一緒になって今まで無かったものを新しく作り出していく。それが良いんだと思う。私もそう思って文化庁の長官をしているつもりだ。

＊

司会 実行委員長の大久保さんからお礼を兼ねて…。

大久保 「私は国立女性教育会館のボランティアとして仲間たちと長年活動してきた。素敵なハコに血をかよわせたいと、美術館や博物館、図書館などの関係者との話し合いも重ねてきた。しかし今回の文化ボランティアフォーラムは、ハコものに限らず、地域で様々な分野で活動している人たちを巻き込んだもの。初の試みに、不安とチャンスだという思いがちょうど半分ずつあった。しかし、実行委員と共に話を詰めるなかで最終的に得たのは、ここでぶつかることによって、新しい何かが生まれるだろうという確信だった。今回のフォーラムで出た、「ぶつかり合い」「コミュニケーション」「思いやり」「人権」「官と民の意思の疎通」という言葉。これらをいったん持ち帰り、咀嚼し、参加者一人ひとりのなかに落とし込み、次の活動へと繋げていただきたい。

今回のテーマは「出会う・つながる・動き出す」。今後活動するなかで、もっと元気がほしい、もっと繋がりたいというときには、皆様方から手を挙げて動いていただければと、実行委員一同切に願っている。

最後に、文化庁の長官をはじめとし、関係者の方々、国立女性教育会館の方々、埼玉県の方々、それから何よりも、参加者が主体者となってこの会を盛り上げていただいたことに、実行委員一同本当に感謝している。ありがとうございました。

けんかがつなげる!? 文化ボラ

ボランティアの人たちは様々な人と「けんか」している。しかし、その「けんか」を乗り越えた暁には、強いつながりが生まれ、協力体制ができてきている。河合長官が最後にまとめたこの言葉は、司会を務めるなかでも新鮮な響きがあった。

私は約5年間日本科学未来館でイベント開発や展示解説を行ってきたが、ここでも内部のいざごはある。自分たちが楽しみ、相手を喜ばせることを目的としているボランティアと、お客様が喜ぶ場をつくるために彼らを配置・管理しようとする職員とが、少しの目的のずれで「けんか」に発展する。そんな「けんか」をうまく昇華していくために必要なことは？それが今回の分科会の発表で何度も提示された「コーディネーター」であろう。私自身学生のボランティア団体の代表を務めていてわかるのだが、ボランティアは基本的に「自分が楽しいこと・人のためになること（で自分が満足する）」をモチベーションとしているので、ただ集まるだけでは収拾がつかない。特に行政やミュージアムなどの組織がつくるボランティアは「モチベーション」を維持できるようなコーディネート能力が問われる。コーディネートができているところは様々な人がいり混じる中でボランティアの意識が高められ、行政相手にも数々の成功を収めてきている。

ボランティアは基本的には自分によりよく生きるために手弁当でも楽しいことに挑戦する人たちだと思う。そのような仲間同士が「けんか」だけで終わらないためにも、「コーディネーター」の立場を確立させ、育成することが不可欠なだろう。私自身も、ここで出会った人と刺激をうけあい、いつかコーディネートできる立場となれるよう日々楽しくボランティアをしていきたい。

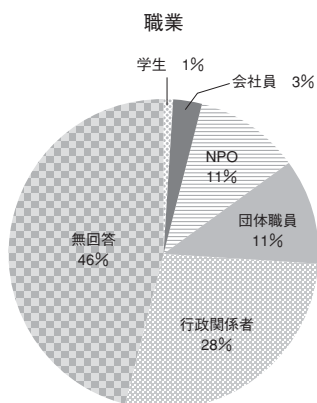
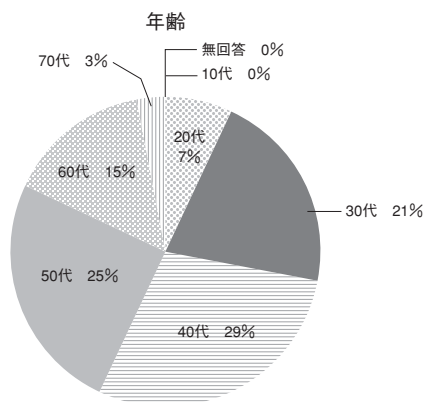
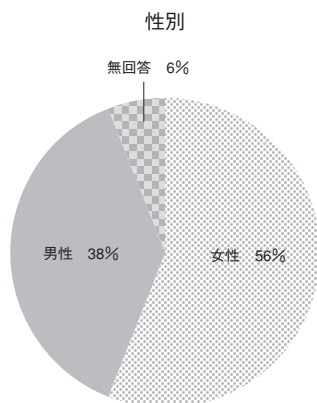
(藤田 大悟)

文化ボランティア全国フォーラム2006 アンケート

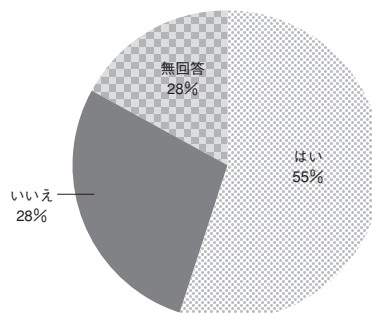
参加者にアンケートへの協力をお願いしました。
96名（うち記名者54名）から回答を得ることが
できました。 回収率：46,2%

●参加者の属性

参加者は30歳～50歳代が中心で参加者の75%である。女性がやや多く、半数以上がボランティア活動をしている。また、行政職員が3割程度参加しており、行政の関心の高さを伺うことができる。



現在ボランティア活動をしているか



アンケートの自由記述より（抜粋要約）

1. 公開フォーラムで印象に残った点は？

- * 成功した実例が聞けて勇気がでた。参加できなかった他の者へ説明するために「八雲国際演劇祭と人づくり」の内容の詳細を紙面でいただけると嬉しい。(50代女性・NPO)
- * 事例発表は充実、感銘を受けた。ただナビの方のご苦勞も分かるが、自分の意見、評論は控えめに、発表者にもう少し時間を渡して欲しい。(60代女性・ボランティア)
- * 「文化ボランティアとは何か」「モチベーションを上げるには」などが自ら何かをしよう、したいという原動力がどこにあるかを知ることができた。(50代女性)
- * 津屋さんの発表に感動した。これまでの苦勞など共感できるところが多かった。九博の発表で、ベビーカーの例を出すなら、なぜだめなのかその理由を確認してきてほしかった。そこがけっこう重要。行政はたて割だからといって片付けられたのは残念。(40代女性・NPO)

2. 分科会で印象に残った点は？

- * お国なまりで熱い話が聞けた。人づくりはその人の生きざまであると感じ、元気になった。(50代女性・行政関係者)
- * 「ボランティア」と言っても、「プロ」に意識を変えていけることがわかった。金銭的な報酬がなくても、経済的なことまで考えている方がこんなにいることにおどろいた。(40代女性・NPO)

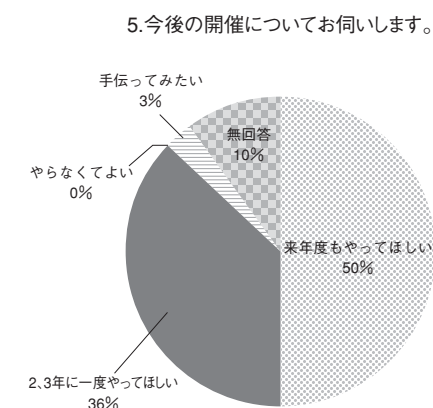
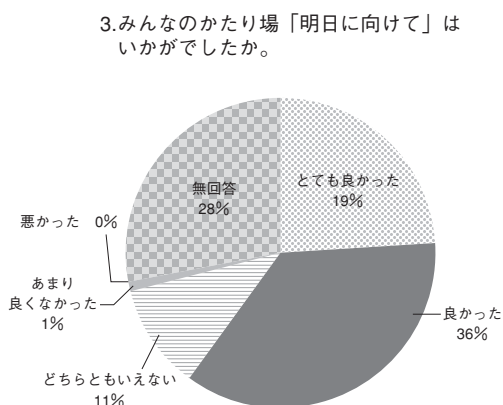
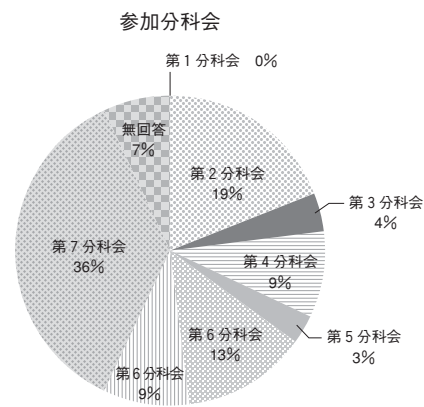
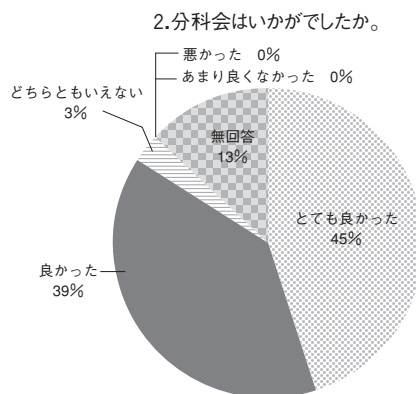
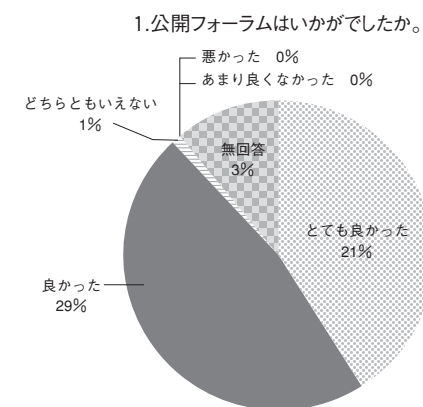
- * ぶらの演劇工房のいろいろな工夫は、いただきたいアイデアがいっぱいで元気ももらった。サイトウキネンフェスティバルのボランティアのデータベース化も参考になった。(40代女性・NPO)
- * ボランティアが何を望んでいるのか少しわかった。行政の立場の人間が同じような悩みをかかえているのが分かった。人と人との関係が重要と再認識。(20代女性・団体職員)

3. みんなのかたり場「明日に向けて」で印象に残った点は？

- * 他の分科会話を聞けてよかった。いつも自分がでていない分科会はどんな話だったかなと思っているのでかたり場はよかった。(40代女性・行政関係者)
- * すばやくまとめられ発表されたこと。フロアーの方も思いを自然に発表されていたこと。(50代女性)
- * 参加者の多くが元気をもらったようで大いに成果があったようだ。私も大変勉強になった。自分たちの活動の意義の裏打ちをもらったみたいで、自信がついたのではないかな。(30代女性・行政関係者)
- * 分科会でさまざまなキーワードが深められなかったのが残念。また司会者には前向きな発言をお願いしたい。司会によってフォーラムに何かを求めているのに対し、消化不良を起こしていた人々が発言をする機会を失ってしまったと思う。(30代男性・会社員)

●各プログラムについて

全体に参加者の満足度は高かったといえよう。特に「公開フォーラム」と分科会の評価が高く、「みんなのかたり場」が相対的に低くなっている。次年度への開催期待は、半数であるが、2、3年おきの開催を希望している人が4割近くおり、合わせると次回開催の希望は約9割に近い。



4. 全体を通して良かったことは？また改善してほしいことは？ アンケートの自由記述より（抜粋要約）

良かったこと

- * 全体の構成、組み立てが多様で選択できることがよかった。事例もいろいろちがった方面を取り上げられたことはよい。多方面の方と出会えて情報交換できたことが嬉しい。(60代女性・ボランティア)
- * ささまざまな活動を知ることができた。企画・実践者の発表が生き生きとしていた。よく理解できた。すべての方の発表能力がすばらしいと感心した。(60代女性)
- * 自分たちの活動がどの程度のものかよく認識できた。問題点がみえてきた。(50代女性・行政関係者)
- * 若い方の運営。情報交換会をはじめとする夜のプログラムがユニーク。長官が最期まで出席されたこと。(男性40代・会社員)
- * 今までの研修会とはちがう、人と人とのつながりが厚い。気持ちやすくなった。「ボランティアとは自発性」と痛感した。(50代女性・行政関係者)

改善してほしいこと

- * 参加している方たちがどのような方なのか、またその活動がわかる資料や名札があるとよいと思った。なかなか交流しにくい面もあるので。(40代女性・NPO)
- * 行政関係者の参加が少ないので、参加を増やせる方策を何か…。(30代女性・行政関係者)
- * 交流とナイトセッション、分科会はとてもよかったが、課題についてこまかく話せるセッションもほしかった。(60代女性)
- * 時間が短かく、講演者も大変だったと思う。もう少し分科会の時間をとって欲しい。土、日で開催してもらおうと出席しやすい。(50代女性・会社員)
- * 分科会をさらに発展させ、参加者の意見交換ができる場もあってはどうか。初日にグループごとに交流できる場がほしい。夜の交流会が盛り上がると思う。(40代男性・行政関係者)

初回のフォーラムであり、参加者同士のコミュニケーションを促すために会場も宿泊ができる国立女性教育会館を選択したが、功を奏したものとなった。会場となった施設の職員の柔軟な対応が大会を成功に導いている。女性教育会館には深く感謝したい。

(廣瀬 隆人)

フォーラムを終えて 実行委員、文化庁担当者、事務局より

●実行委員

大久保 邦子（文化ボランティアコーディネーター）**

はじめての全国集会にしては、予算も準備期間も実に厳しいものだったが、その分、実力者ぞろいの実行委員の阿吽の呼吸で事務局をサポートする仕組みが自然にできていった。若手によってメーリングリスト（以下、「ML」と略）が起動されたがその威力と魅力と課題も痛感。終盤、自発的に動き出す委員の姿には目を見張った。事務局を中心に忙しくも充実の日々。但し、参加者にはどれほど満足していただけたか？文化庁担当者の柔軟な対応と、事務局アムの健闘に感謝したい。

黒沢 伸（金沢21世紀美術館エデュケーター／現・金沢湯涌創作の森所長補佐）

フォーラム開催時に勤務していた金沢21世紀美術館から新しい仕事場へ異動し3か月が立ちました。今、そこに新しくボランティア組織が生まれつつあります。公募ではなく自然に立ち上がった組織で、ちょうど音楽活動のバンドを組むような感覚です。活動で最も大切にしなければならないこと…外してはならないラインを「楽しさ」とし、宿題ではない、自由研究のようなボランティア活動として成長してゆくことに期待しています。

篠田 信子（NPO法人ふらの演劇工房理事）

大会は良い評価を得たと伺いました。渦中にいるとなかなか成果はわかりませんが、準備過程で非常に多くの事を学び考える機会となりました。若者のすばらしさ、最後は何とかする大人？の踏ん張りに感動し、一方、おおくの課題も見つかり、自らの未熟さも痛感しました。全国のリーダーが集った大会を終えて、それぞれの地でどのように伝えられ、向上するためのヒントがあったのか知りたいものです。私は、今までの組織を抜け、新たな文化ボランティア活動を始めることにしました。

柴田 英紀（鳥取県文化振興財団文化芸術デザイナー）

平成9年度文化庁派遣在外研修員として米国で研修した折、ボランティア・マネジメントを体験して以来、いつか日本にもこのマネジメントが必要となる時代が到来するであろうという予感と期待をもっていた。課題は日本型のマネジメントプロセスをつくり定着させていくこと。それは必ずや文化ボランティアの発展に結びついていくはずである。このたびの開催にあたり、ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

鈴木 章生（目白大学人文学部助教授）

台本づくり、構成などひたすら裏方に徹してきました。慣れない仕事でしたが、緊張やあせりは微塵もなく、舞台とマイクがあれば後はアドリブで上手くやってくれるだろうと…。皆さん自己表現が上手な（自己主張の強い）方の集まりですから。でも、何をどう伝えるか、一人ひとりの「台詞」と「演出」は重要。それを上手く引き出しながらまとめていく「監督」は、まさにコーディネーターなんだということに気づかされました。感謝。

園山 土筆（八雲国際演劇祭芸術監督・劇団あしづえ代表）

全国から12人の実行委員が選ばれて、離れている距離を補うためにMLが使用された。さまざまなやり取りからわかったことは、ML使用時はあらかじめルールを決めておくといい、ということだった。書式、表現、略語などや相談か、意見か、決定事項か、といったことがすぐ判るようなルールだ。MLをうまく使えば、離れている人材がより活かされる。とても良い体験をさせてもらったので、次回のために記しておく。

田中 弘子（弘前市民会館館長）

文化ボランティア全国フォーラムでは、元気のかくし味を発見！それは、出会い・学びあい・無理をしない。フォーラムの打合せ会議から、帰弘するたびに、どういうわけか高熱でダウン！でも、「パッション」と「ミッション」を持っている人たちとの新たな出会いで、これからも、ちょっぴり無理をし…つづけたいと思っています。

田島 博樹（日本科学未来館ボランティア／現・文部科学省研究開発局宇宙開発利用課）

本フォーラムで私は以下の2つのことを実現したいと考えていました。1つは「学生ボランティア」という存在を広くアピールすること。もう1つは「科学」を「文化」という枠の中に入れ、広い意味で「文化ボランティア」を捉える視点を提示すること。様々な方のご協力により、このような意図も十分に込めることができました。今後も、この新たなつながりが「日本とあなたを元気にする！」ことができるよう、微力ながら貢献したいと思います。

津屋 結唱子（子どもの美術教育をサポートする会代表）

文化庁が「文化ボランティア」活動を推進するという記事を初めて読んだとき、私たちが指すのだと嬉しく思いました。それから3年、「文化ボランティア」をキーワードに、全国の方々と出会い、大きな力をいただき、連携活動内容が深まりました。いよいよ7月には「しが文化芸術体験サポートセンター」が誕生、行政と文化ボランティアの協働による、支援活動がスタートします。本フォーラムがきっかけとなり、今後も、新しい出会いを楽しみに活動の輪を広げていきたいです。

廣瀬 隆人（宇都宮大学教授）

実行委員になってほしいと誘いがあったときは、自分の役目ではないと感じました。しかし次代への橋渡しというコンセプトに惹かれ受けました。演劇関係者をはじめとするすばらしい実行委員の方々から学ぶ機会があったことは大きな収穫でした。出会いによる学びに感謝しています。

藤田 大悟（日本科学未来館ボランティア）

文化ボランティアという言葉を今回のイベントの話を受けたときに初めて聞いた私だが、実際に集まってみて新しい動きが起こり、その中に自分もいる喜びを感じた。20代半ばで各地のボランティアを率いている方々と知り合い、学べたことが一番の収穫である。自分自身、ボランティア活動は「楽しさ」を一番に、そしてその結果「学べる」空間が参加するモチベーションだったので、まさに今回のフォーラムは今までの活動の総まとめの形で楽しかった。ここでの刺激をエネルギーにレベルアップをし、次回会うときはさらにもしろい話を交換しあえるようにしたい。

八木 剛（兵庫県立人と自然の博物館研究員）

これだけの方が（あの予算で）一堂に集結されたのは、奇跡的＝大久保マジックですね。今回もまた、本物の方々は、迫力が違いました。いっそ、ワールドカップみたいに、4年に1回の開催というのがいいかもしれませんね。私自身は、「ボランティア」という言葉に未だになじみませんが、この世界、すてきな方に多く出会えることも確かなようです。

山下 治子（「月刊ミュゼ」編集長、アム・プロモーション）＊

大久保さんの熱意、各地で個性豊かに活躍する実行委員たちの情熱と実績、文化庁担当者たちの暖かさ、長官のおおらかさ、そして全国から来られる参加者たちの想い。事務局はこのフォーラムに関わるみなさんの大いなる気持ちを時間も量も一番感じ、そして学んだのかもしれない。いたらない点も多く反省するが、それよりもたくさんの笑顔に会えたこと、支えてくださったみなさまの寛大さに感謝している。お礼の気持ちは、次につなげることで…。

＊ ＊実行委員長 ＊ ＊事務局長

●文化庁

大谷 圭介（文化庁長官官房政策課文化ボランティア専門官／現・文部科学省初等中等教育局幼児教育課幼保連携推進室長）

全国フォーラムの開催を決めたとき、フォーラムを本当に参加者のためのものにしようと思いました。それには役所ではなく、文化ボランティアの実践者が企画し、運営する形態しかないと思い、全国の方々にお願いすることにしました。私は何もせずただ見ているだけでしたが、いろいろ勉強させていただきました。フォーラムが無事開催できたのは実行委員、参加者のみなさんのおかげです。ありがとうございました。

安藤 博（文化庁長官官房政策課）

今回のフォーラムは、参加者や実行委員の皆様が持つクリエイティブな力を互いに出し合い、また新たな出会いや人と人のつながりが生まれ、参加者全員が「元気」になっていく様子を目の当たりにした2日間でした。発表のあった各事例はいずれも多くの課題や問題を乗り越え、素晴らしい活動を展開されているもので、全国各地に熱意溢れる様々な動きが起こっていることに刺激を受け、大変勉強になりました。実行委員会、参加者をはじめこの会に関わって下さった皆様に改めて感謝申し上げます。

松岡 潤治（文化庁長官官房政策課／現・神奈川県教育委員会教育局教育政策課）

市民の創意と意欲による文化ボランティア活動は、官民の区分け等の従来の社会制度を越え、新しい日本社会のあり方を創っていく可能性に満ちています。例えば、地域の文化力で学校の授業づくりを支えるような取り組みは、子どもたちが将来にわたり、公的な社会の役割をボランティア精神で豊かにする姿勢を自然に育んでいます。これは、日本に成熟した大人の社会づくりが始まったということだと思います。私は今回のフォーラムに関わり、そんな動きが全国で着実に起こっていることを実感し、とても元気な気持ちになりました。

●事務局

針生 睦美（「月刊ミュゼ」編集部、アム・プロモーション）

文化ボランティア全国フォーラムには事務局スタッフとして参加した。初めてのことばかりで試行錯誤を繰り返しながらの作業となった。しかし、実行委員や参加者からの「がんばって！」「ありがとう！」「ありがとう！」という温かい言葉をいただき、大きな原動力へとつながっていった。振り返ってみると、250名を超える参加者、実行委員のみなさん、フォーラムを手伝ってくれた学生さんなど、たくさんの方との新しい出会いがあった刺激的な2日間であった。

安田 美世（「月刊ミュゼ」編集部、アム・プロモーション）

多くの方々のこんなにも前向きな気持ちを感じながら、事務局として仕事ができただけに感謝している。フォーラムが終わり少しの間をおいてはじまったこのレポート作りも、原稿に目を通すたびに当日の熱意や元気がよみがえってくるようだ。また、会場を駆け回るなか声をかけて下さった、参加者の佐藤さん（札幌・コンカリーニョ）、中島さん（久米島・教育委員会）と名刺交換ができたことがとても嬉しかった。次回も楽しみだ。

そんな日があったから～開催までの経緯～



朝の打ち合わせで「エイッエイッオーッ！がんばりましょう」と実行委員長の久保邦子さん



初日の午前9時。実行委員とフォーラムスタッフによる打ち合わせが始まった。指揮監督は鈴木章生さん（右）

「文化ボランティアが集う全国フォーラムを開催したい」。その企画が持ち上がったのは2005年の初夏だった。長年、文化ボランティアとして活躍し、そのコーディネーターもしてきた大久保邦子さんは、近年の全国各地での文化ボランティアの盛り上がりを感じ、一方で、行政担当者や施設担当者とのすれ違いから「交流」の必要を感じていた。大久保さんは、周囲の人たちにそのことを熱く語り賛同する仲間たちを増やしていたが、すると、まさに気運か、文化庁の担当者の方にも文化ボランティア活動をしている人たちなどからそういった要望が寄せられているという情報が彼女のもとに寄せられたのだ。

「それならば、やってみよう」。大久保さんが意志を固め、私どもも事務局をすると申し出ると、文化庁も委嘱事業として応援してくれることになった。やがて大久保実行委員長のもとに大学生も含めた全国のいろんな分野の13人が実行委員として集まる。全国で活躍する錚々たるメンバーだ。ただ、それゆえに実行委員たちはいずれも多忙な人ばかり。仕方ない、東京方面のメンバーは2回出ることにし、第1回実行委員会は2回に分けて行った。11月にはメーリングリストが立ち上げられ、実行委員の誰かが上京するとなると即、集まって話し合った。フレキシブルかつパワフルな会合をもって意見をぶつけ合った。「この会の目的は何?」、「メーリングリストだけに頼っちゃだめ」、「『また、やりたいね』と最後にいってもらえたら成功だ!」、「いっそ、大名刺交換会にでもするか」…などなど。

秋が過ぎ、冬の風が吹くと会場の下見、要項の決定、募集チラシに向けた準備が具体的になった。シンボルマークは知り合いのデザイナー金子さんに協力してもらった。明るく伸びやかなマークとなった。そうすると、実行委員たち同士、「とにかく、参加者には元気をもらって帰ってほしい」という気持ちが確固となっていった。

大晦日の日にホームページがアップされ、チラシも1月半ばにできた。Web申し込みは1月10日からだ。対応する事務局が本格的に動いていったのが、まさにここから。事務局の針生・安田はてんてこ舞い状態となってしまったが、とにかく軌道修正をしながら動いた。実行委員たちそれぞれが持ち場で力を発揮し、特に鈴木さんが作成した詳細なシナリオにはみな感嘆した。開催前日の夜中まで話し合いが続き、ようやくその日を迎えたのであった。あとは、現場で対応するしかない。

(まとも・山下 治子)

開催までの日々記

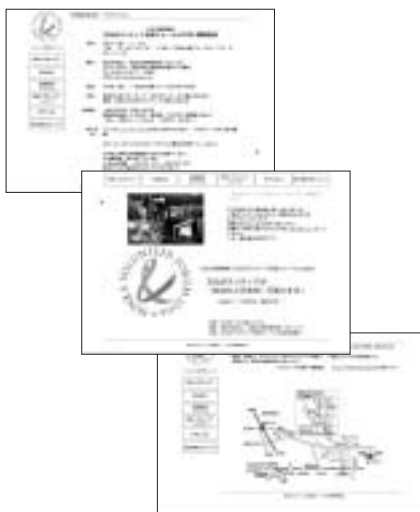
- | | |
|--|--|
| <p>6.某日：市民と協力した「文化ボランティアネットワーク会議」を開催してはどうかという提案があったと、大久保さんからメールをいただく。</p> <p>7.21：文化庁で打ち合わせ（大久保、山下）。会場や日程について検討。国立オリンピック青少年総合センター（オリセン）、新宿・花伝舎、国立女性教育会館（ヌエック）、企業の会議室、大学などが候補にあがる。</p> <p>8.4：オリセンを見学。文化庁の大谷さんが同行してくださる。（山下）</p> <p>8：日程・開催場所・名称について検討</p> <p>18：実行委員について検討</p> <p>9.中旬：開催要項やプログラム、実行委員会の日程調整など進む。</p> <p>10.7：第1回実行委員会（大久保、篠田、鈴木、園山、田島、田中、津屋、廣瀬、山下）演劇人たちのパワーが新鮮。</p> <p>21：第2回実行委員会（大久保、鈴木、八木、黒沢、山下）</p> <p>10月は週1回ペースで打ち合わせをもつ。</p> <p>11.2：藤田大悟さんがメーリングリストをたち上げてくれ、最初のメールがきた。</p> <p>23：ヌエックを下見（大久保、田島、藤田、山下）。撮影した写真を田島さんがMLで実行委員が見られるように流してくれた。</p> <p>12.1：打ち合わせ 要項づくり</p> | <p>12.10：松葉谷温子さんが上京されるとのことで打ち合わせ</p> <p>12.22～23：ヌエックで開催要項などの最終案、シンボルマーク決定。深夜の会議。（大久保、田中、鈴木、藤田、岩本、山下）島根の園山さん、金沢の黒沢さんともに大雪で辿り着けず、残念。</p> <p>12.26：文化庁で打ち合わせ</p> <p>31：文化ボランティア全国フォーラムのホームページアップ</p> <p>1.11：フォーラムへの参加募集チラシ校了。Webからの受付はじまる</p> <p>2.14：打ち合わせ 製作物等</p> <p>20：打ち合わせ 進行段取り、資料等</p> <p>24：打ち合わせ 進行などを廣瀬さん、藤田さん、田島さん</p> <p>3.1：ヌエックで打ち合わせ 会場の最終確認、宿泊の部屋割り</p> <p>6：当日配布資料の印刷など。文化庁の担当者も手伝ってくれた。</p> <p>9：ヌエックに実行委員がはじめて一堂に会し、打ち合わせ。</p> <p>10～11：当日</p> <p>12：「皆様へ なにはともあれ、無事に終わったことをまず感謝したい気持ちでいっぱいです」の実行委員長がMLで届く。No.457をカウントしていた。</p> <p>7.20：MLはその後もお礼や連絡事項が続き、7月20日現在でNo.500となっている。</p> |
|--|--|

製作物いろいろ 準備から運営までに製作した主なもの

●告知と申込み



オリジナルのマーク。
「「ボランティアとは何か」。僕にはすぐ答えが出
ませんでした。まず、シンプルに「結ぶ存在」
というコンセプトが浮かびました。何かと何かを
つなぐ「無私」の存在を「&」に託してまとめま
した。何と何をつなぐかは、それぞれの人の志と
思います。このマークがさわやかな前進の推進役
になればと願っています」(デザイナー、金子英
之さん (i2 design association) より)



お知らせと申し込みができるホームページ



チラシ（表）。
A4判、カラー

（裏）

●当日の資料など



配布資料のための
フォルダー。マー
クを入れたショッ
キングピンクの目
立つ色に

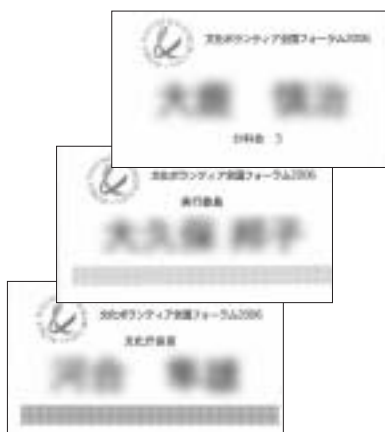


当日配布の
プログラム。
A4判16P

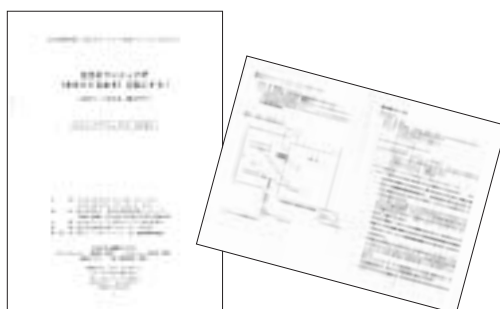


当日配布の
アンケート

●運 営



名札。参加者、講師、実行委員などに色分けして
5種類



スタッフマニュアル（台本）。鈴木委員渾身の作。
A4判34P。表紙には「臨機応変に、次のこと、
先のことを考えろ！つらいときは、つらいと声
を出そう！『ほう・れん・そう』を大切に！」
「失敗はつきもの、寛容第一！忘れるな、感謝の
気持ちが元気にさせる！」とある



布製スタッフシール。ぱっと見て
「スタッフ」であるとわかるように
衣服の上から貼った

文化ボランティア全国フォーラム2006
参加されたみなさん

◆一般参加者 *都道府県別、50音順
 <北海道>
 赤石知恵子、磯田憲一、今井修、片山美代、榊原綾子、佐藤ゆみ子、津幡克治
 <青森県>
 佐藤史隆、杉山陸子
 <岩手県>
 中川智恵子
 <宮城県>
 大槻祐弘、小林テル、柴田聡史、十二林伸江、丹野裕子、富田直美、三田雅子
 <秋田県>
 稲場みち子
 <山形県>
 稲村英好、内谷幸、江口由美、折原弘一、亀岡博、須藤英克、長澤千恵子、間宮加代、村野隆男、渡部誠夫
 <福島県>
 梅宮渉、菊地紀雄、佐藤貴司、高橋誠
 <茨城県>
 飯山直樹、石井豊、大内弓子、大録久美子、小野俊郎、斉藤良米、菅井薫、菅田哲夫、田島千枝子、友部貴夫、中村大介、永田勝利、生江信孝、行木陽子、新沼牧、平山陽子、村岡孝美
 <栃木県>
 池澤真司、小倉次男、星野朋子、渡邊公
 <群馬県>
 鈴木信雄、洞口正史、本村純子
 <埼玉県>
 青木百枝、赤澤和代、浅野晴樹、板敷文、井上良美、岩崎寿美子、岩田恵子、小川かつ江、小川征夫、小野塚通子、小野寺一樹、神田みづえ、北島通次、栗田すみえ、小高みさ子、権田貴久子、佐藤由利子、鈴木和子、田口美恵子、辻沢操、西川正、西田さやか、野田あさ子、藤木エミコ、藤野龍宏、古澤立巳、古澤博子、正木光子、松谷正晴、松本公明、丸井恭子、宮寺一美、宮本紀子、矢内克幸、若園雄志郎、和智八重子
 <千葉県>
 伊志嶺絵里子、井上智裕、追川ケイ子、大木恒男、尾崎倅美、杉田絵美、高橋誠、土屋憲一、的場知明、峯岸喜子、望月剛、龍崎英子
 <東京都>
 天野由利子、安藤寿、市川茂敏、伊藤隆之、江川武男、遠藤翼、大久保静香、小川桂子、川口みゆき、菊池守、小林徹、高橋英久、田中国弘、

趙顕重、沼田雅美、早坂津夜子、福島正和、福永朋子、船橋史、松下富子、宮口高枝、安田善英、横山浩司
 <神奈川県>
 赤田ちはや、佐竹渉、白井ヒサ子、高橋一光、森田真人、四方田清
 <新潟県>
 高波亮子
 <富山県>
 堀泰洋
 <石川県>
 静岡俊郎、能登浩代、山本美智子
 <福井県>
 林直樹
 <長野県>
 牛越昭代、荻原幸子、小林宏子、宮本銀二郎、山倉奈夫美、山田弥生
 <岐阜県>
 伊藤真知子、内田晴代、高橋順、田尻成子、西尾円、長谷川健彦
 <静岡県>
 青木彩葉子、石川順子、杉崎千鶴子、成宮ひろみ
 <愛知県>
 伊藤英彦、近藤美由紀、今野恵子、谷文乃、藪中晶子
 <三重県>
 大西毅尚、岡本礼子、中山詩代里、毛利伊知郎
 <滋賀県>
 板倉正直、奥村恭代、門脇宏、木村敏子、田附宏之、中川正子、西村順子、平井秀子、古市百利子、村木一夫
 <京都府>
 楠北斗、吉田裕一郎
 <大阪府>
 石川梨絵、内山十糸子、吉村幸子
 <兵庫県>
 寛雅雄、島田浩次、中野真紀子、向山良子
 <和歌山県>
 岡田泰洋、関本愉香子
 <鳥取県>
 野崎淳、宮崎幸子
 <島根県>
 荒川嘉代子、有田美由樹、阪本成子、須山美玲、三島操子
 <岡山県>
 石井真貴
 <広島県>
 新出美津子、山本綾香、山本真治
 <山口県>
 片岡恵、西山香代子、増田圭介
 <愛媛県>
 上田純子

<福岡県>
 永田香織
 <長崎県>
 小林美智子、土橋佐代子、畠本哲郎
 <宮崎県>
 黒木真、山形幹紘
 <鹿児島県>
 市来淑子、福永修三
 <沖縄県>
 中島徹也、宮里学

◆プレス
 扇谷勉、田村孝子（以上、NHK）、多和田元（読売新聞）、名古屋武司（東松山ケーブルテレビ株式会社）、福井薫子（株式会社ぎょうせい）、山下務（月刊ミュゼ）

◆フォーラムサポーター（大学生・大学院生）
 五十嵐誠、桑島英理佳、對馬葵（以上、宇都宮大学）
 大鹿慎治、釜坂彰子、佐藤俊彬、谷口侑衣子、津屋有季、野間隆秀（以上、子どもの美術教育をサポートする会）
 岩本麻生、中川亮子、金井明子、法木航（以上、目白大学）
 和田達典、井田明日香（以上、日本科学未来館ボランティア）
 山崎敦子（東工大Science Techno）
 浅井雅司

◆お茶サービスボランティア
 有年和子、江森由美子、小川三枝、梶谷和子、加藤みさ子、金井倫子、斉藤ジョセリン、島野正子、杉山マサ江、館岡シズ江、窪田美智子、中野裕子



文化庁委嘱事業

文化ボランティア全国フォーラム2006レポート

文化ボランティアが〈あなたと日本を〉元気にする！

～出会う・つながる・動きだす～

2006年8月 8 日 初版第1刷発行

2006年9月25日 第2刷発行

編集・発行 文化ボランティア全国フォーラム実行委員会

事務局 (株)アム・プロモーション

〒108-0074 東京都港区高輪2-1-11-230

TEL 03-5449-7033 FAX 03-5449-2023

デザイン 渡辺祐一(シーアイエー(株))

印刷・製本 シーアイエー(株)

ENGINEER FORUM 2006

